

# 回想の松島正儀（一）

——ある評伝の試み

遠藤興一

はじめに

- 一 東京孤児院の設立と北川波津
- 二 孤児救済の展開と施設の充実
- 三 東京育成園に引きとられて（以下 次号）

はじめに

本稿は一応、回想風にまとめた松島正儀まそのりの評伝である。松島については今日、〃知る人ぞ知る〃といった社会的位置にあり、一部の関係者を除けば、世代交代もあって、社会福祉の世界では急速に忘れられつつある。やがて彼を知る人びとがこの世を去った後世に遺されるものは多分、ほとんど無いのではなからうか。実践家として本領を発揮したその人生は、モノやカタチで後世に伝わることはない。生きた人生それ自体がその全てだからである。全力投球で現場の課題に取り組み、現場に骨を埋めたとして、いったい誰がその志と労苦を認めるといえるのか。松島の場合も、彼によって育てられ、薫陶を受けた施設利用者達、職員、支援者の他に、いったい誰がその事蹟に真の意味で興味を示すであろうか。社会福祉とは、つまるところ「めし」の確保をすることだという、あの困難な時代に、ひたすら明日の「めし」を追い求めたことに飽食の今日、誰が関心を持つだろうか。だが、このあたりまえで、実はあたりまえでない課題を己が一生のものとし、孤児の生命と生活をひたすら守り通した生涯を、私はすばらしいもの、大向うをうならせるあまた世間の偉業と比較して、遜色のないものだと思う。松島についてのエピソードに、普段着にまつわる話がある。常に黒の上下に黒い靴、白いワイシャツに黒いネクタイ。言葉使いはいつも丁寧で穏やか、心に激するものがあっても、外面に出すことはめつたにない。九二歳の人生を、そうした簡素で平板なスタイルを持ち、淡々と歩き通した。だが、その生涯を細かくたどっていくと、そこから我われが見るものは、外面からはおおよそ想像できない激動の生涯である。本稿はそれを正面から「伝記」として描くのではなく、彼をとり巻く時代状況や社会環境を踏まえ、ビジュアル資料をささみつつ、一介の現場

実践家が歩んだ軌跡を、自由気ままな気持ちで筆を動かし、いささか「評伝」としての体裁をとることに心懸けてみたい。

## 一 東京孤児院の設立と北川波津

丹野喜久子によると、明治四五（一九二二）年二月にロシアのペテルブルクで行なわれたニコライ（Ivan Demitrovich Kasatkin）大司教の追悼講演において、ハリストス正教日本宣教団は孤児院経営も行ったことが報告された。また、牛丸康夫のまともニコライは日本に社会事業を起したという。具体的にいうと、ハリストス正教は孤児院を経営し、それがまた唯一の社会福祉施設だったというのである。果して事実はそのとおりであったか。まず初代園長、北川波津について触れてみる。東京都府中市多磨霊園にある墓碑は、その生涯を簡潔に記し、「明治二九年八月、三九歳の時、東北三陸地方大海嘯に際会し、本園を創立、爾来四三年の間、専心育成の事業に盡瘁、昭和一三年三月三日、八一歳にして神の国に召されたり」。多少詳しく言い直すなら、明治二九（二八九六）年六月の三陸大海嘯によって生じた罹災孤児のうち、二〇余名を引き取り、東京市麻布区筈町三一番地の民家に収容、偶たま正教信徒であった北川が子供たちの世話にあたることとなった。当初名称は孤児教育院、院長は但木鵬である。中村健之介が伝える北川の関与次第は次の様である。

北川波津は母性愛がつよく、現実を恐れない、実行力のある人である。そして「お嬢さん育ち」のきまじめな人のよさ、同情

しやすさは、離婚を体験しても消えなかった。波津に孤児の養育に情熱を傾けていると見えたイオシフ但木鵬に共感し、二人で協力して孤児たちの父となり、母となって子どもを育てようと思った。

北川には当初、「養育に情熱を傾けていると見えた」但木の相貌であるが、やがて彼は事業を投げ出し、信徒でありながら芸者遊びにうつつを抜かす生活態度を繰り返し、彼に失望した。このことは「東京孤児院設立趣意書」に「前院主のために捨てられた」孤児の行方を案じる記述がある反面、但木の業績に触れた文脈は出てこない。やがて、事業はいったん破綻と挫折に直面した。困った波津はとるものもとりにあえず、自力で事にあたり、私財を売り払っては日々の生活費とした。それでも足りず、子供たちとともに朝毎納豆の行商をした。なおかつ借金は増える一方であったという。ニコライの「日記」を開いてみたい。

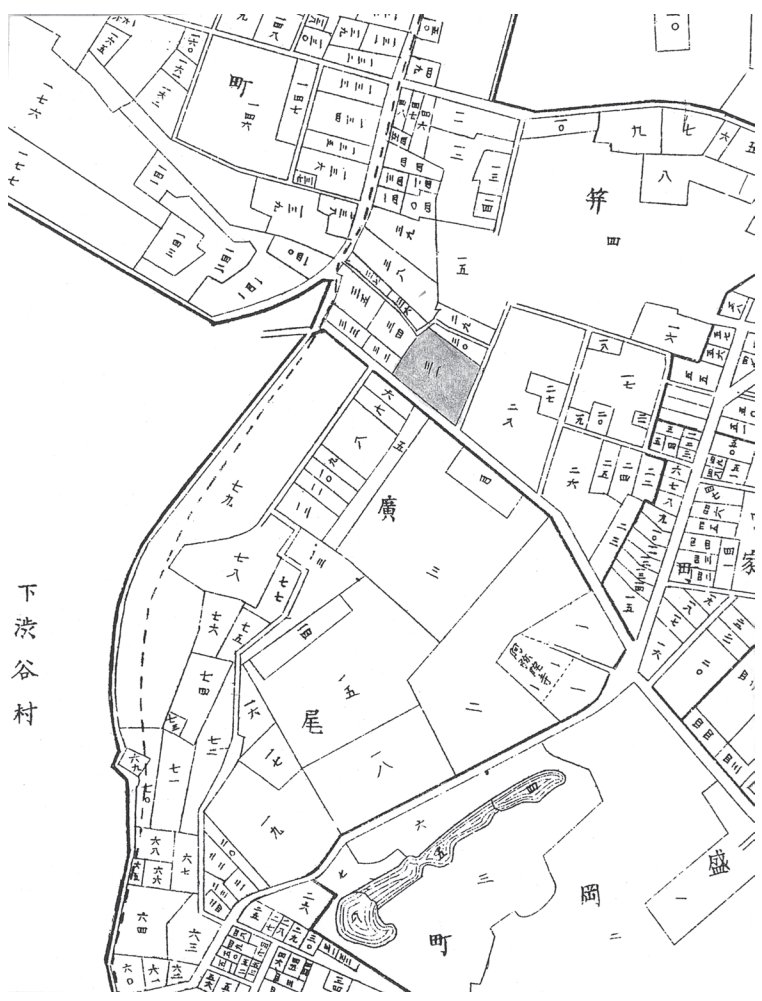
なにより困るのは、かわいそうに孤児院が閉鎖の危機に瀕しているということだ。これから神がいかになさるか分からない。わたしは、神学校に入れる年齢の子供たちは喜んで養いたいと思う。しかし、他の子供たちをどうするか。ソフィア（ママ）（北川波津の聖名）に、その子たちを養うための資金を見つける力があるか、孤児院を運営していく力があるか。といって、彼女の代わりといって、他にだれがいるかというのか。

ともかく収入の途を求めて、あらゆることを試した北川であるが、「自働自活」に子供を全面参加させることは、どうしても無理で、さしあたり学齢期の子供たちは通学させなければならぬ。そこで牛込区代田私立小学校、北辰尋常小学校に通わせることとし、行商は二年目に廃止した。そして、「仰ぎ願くば大方の慈善家諸君、此の至微なる一寡婦の赤手に依托せられたる無告の孤児を記憶せられん」ことを江湖に訴える。どうしようもない急場にさしかかると、その度毎ニコライからわずかな援助金、篤志家からわずかな寄付が届くだけで、文字通り



日々あえぐようにして二六名の孤兒を養った。とうとう明治三〇（一八九七）年一月二〇日、院舎を人手に渡し、子供達を自宅に引き取るはめになる。そこは手狭に過ぎたため、結局翌三一年二月二七日、再度牛込区原町三丁目七五番地に移転した。この年四月、名称を孤兒教育院から東京孤兒院に変更、正教会は北川の単独経営に移した。趣意書をみると「賛助員諸氏に依頼して」経営に当る、つまり賛助員制度をはじめとする、一般寄付をもつて経営の基盤とする方針を立てた。処遇方針を明確なものとし、「彼等をして唯り、独立せる社会の一員として世に出さしむるのみならず、確実なる信仰と倫常とを以て教養の主眼となし、各自天賦の性情に応じて将来の方針を立てしめんとする」<sup>3</sup>ことが意図される。話は脇道にそれるが、最初孤兒院を設けた麻布区<sup>こうがい</sup>筈町の地勢について付言してみたい。当時の地図を開くと、区内では赤坂区、渋谷区に接し軒並の続く住宅地であった。「筈」という地名が広尾川に架かる筈橋に由来することから分かるように、水利は良く、付近は五段田（五反田）に続く稲作地帯にあたっていた。造作が手狭になったための移転であるが、生活環境は概して良かった。頃日賛助員の拡大を求めて、次の様な方針を明らかにしている。

妾は素より自ら孤兒養育の大任を負ふの力なく、只但木氏の慈心を讃助し、多少院内本院内助の勤めを爲さんとするの希望にて言ふべからざるの辛酸を嘗めて今日に至りたるに過ぎざりしも、今やこの可憐の孤兒と共に院主の遺棄する所となり、二〇有餘名の孤兒を左右に擁し相共に慟哭して此不幸を上天に訴へ、天父の慈憐を祈るの外なきの不運に際會せり。この可憐の孤兒をして斯かる悲嘆を忍ばしむるは實に情の忍びざる所なるを以て、若し、孤兒の親戚知人にして之を引受けんとするの慈善家もあらば孤兒のために此上もなき幸福なるを以て、これを調査し一二名の孤兒を處置したるものの、既に原籍姓名の不明なるものさへ一〇數名ありて、之を解散せんとするは尚更能はざる所なり。此を以て今は妾自ら内外慈善家の讃助を得、尚前院主のために捨てられたる孤兒を保育して本院の設立を繼續せんとす。



麻布区筈町31番地

牛丸康夫『明治文化とニコライ』（一九六七年、教文館）を開くと、ハリストス正教は教勢拡大のためにとつた宣教、教会形成、宗教教育といった事業に続き、慈善事業をここに含めた。しかし、他のキリスト教諸派が慈善に熱心であったことと比べると、ハリストス正教の成果は一カ所、つまり東京孤児院だけであった。必然的にニコライの支援はここに集中的に及ぶこととなり、同じ理由で宗教教育にも力を注いだ。当時の記録には明治四二（一九〇九）年三月以後、麹町正教会伝教者、イオアン大木竹二郎が孤児院の指導者になったこと、それに数人の伝教者、神学生が加わり、孤児院側も北川に引率されて復活祭、降誕祭がある毎に神田駿河台正教会、ニコライ堂の礼拝に参加した。当時は慈善事業に対する世間の関心が低く、その生活運営は楽ではなかった。

この仕事をするといふことが世間への誇りにはならなかったやうに思われます。近所の人には蔑まれ、親戚や知合の人々からさへ疎まれ勝でありました。さういふ場合に、唯一の慰めとしてはやはり宗教的の寄り所より外にはありませんでした。<sup>5</sup>

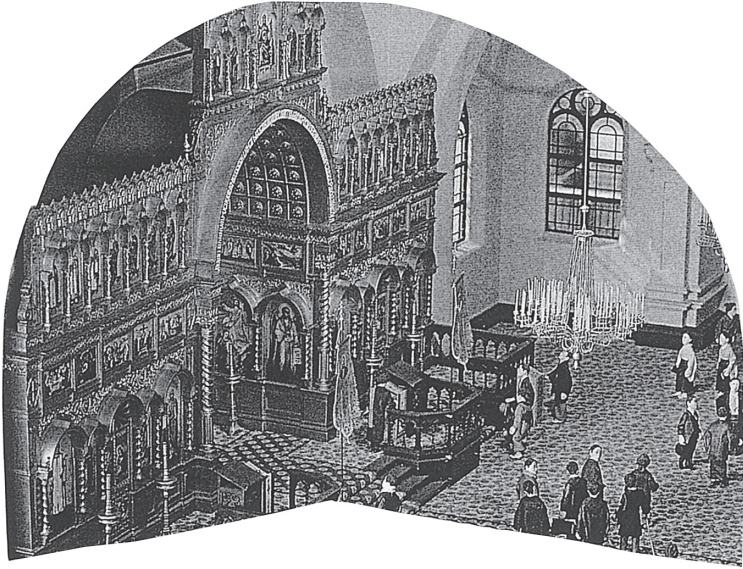
このような環境下にあつて宗教教育、宗教行事に力を入れたからといって、表面的な印象から記者が「宗教は自由であつて、或院の如く講堂に何やら神を祭つたり、仏を並べたりはしない」とみなしたのは間違いで、祭壇を設け、礼拝堂を作つたのは後のこととしても、当時すべからず「宗教は自由」であつたわけではない。ただし日課には宗教行事が含まれている。ちなみに明治三〇年代初頭の日課表をみると祈禱、学習、修養、労働、遊戯、安息、娯楽と出てくる。「午前六時の朝の祈禱、午後七時の夕べの祈禱は、院児が出席して静肅な時を持った。土曜日の夕べの場合には、それが終ると反省会を開いて、一〇歳以上の児童には一週間に行ったことで、誤りや違反があれば、その罪を告白することが求められた」。ニコライの日記にはしばしば洗礼を行った記事が出てく

るが、本稿の主人公、松島正儀もこの麹町正教会で幼児洗礼を受けた一人である。ニコライの日記（明治三七年四月三日）をみると、「麹町の教会で孤児院のこども一二人の洗礼が行なわれ、そのあとでこどもたちがソフイア<sup>（ママ）</sup>北川に連れられ、そろってニコライ主教のところへやって来た」記述がある。牛込原町の家宅にはなかった祭壇を明治三六（一九〇三）年一〇月設置した。そこは赤坂区青山南町六丁目で、一七畳半の広さを持つ礼拝室があった。礼拝室についていうなら、さらに後の大正三（一九一四）年一二月、東京育成園となった後、府下荏原郡駒澤村に分園を設立、敷地内に三三坪の独立した礼拝堂を設け、集会、日曜学校を行っている。大正一三年にはここを北川の聖名にちなみ「フェオドラ会堂」と呼び、やがて地域住民にも開放した。

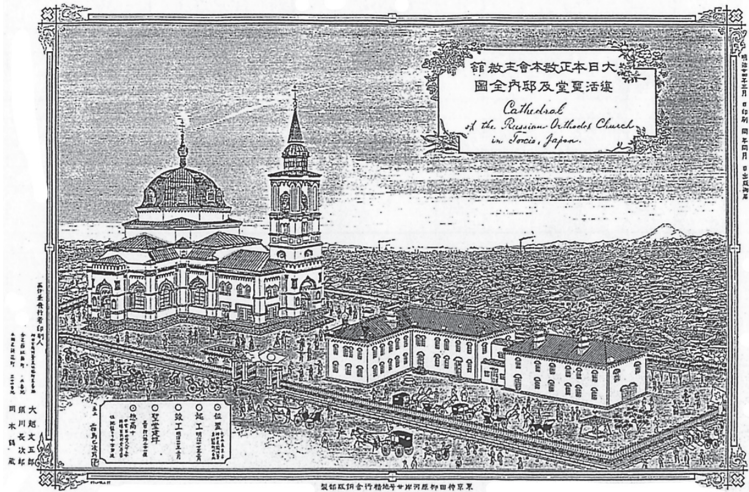
駒澤の東京育成園構内には立派な礼拝堂があります。従来ここに教会の牧師を聘して園児の宗教的教養に務めて居りました。折角大きな礼拝堂があるものを単に園児だけの礼拝にのみ使ふのは遺憾である。広く近在の教へを求むる人達のために開放したらよからうとのことは、夙に北川園主の考へられてゐた所であった。茲に愈々その機が熟し、大正一三年一二月二日を以て、礼拝堂をフェオドラ会堂と命名し、日曜日毎に宗教的集會を開くことになりました。<sup>（7）</sup>

松島とハリストス正教の関わりをたどっていくと、後年、ニコライ堂総務局で信徒理事を務めた記事が出てくる。<sup>（8）</sup>又、正教公会議事録を括っていくと、松島が日曜学校用教科書編纂委員会委員に就いた記事が出てくる。

北川波津は安政五（一八五八）年二月二二日、現在の茨城県水戸市に武家の娘として生まれ、生来勝気な性格で、才氣溢れた女性であった。一九歳の時、周囲の反対を押し切って医者を目指す青年と結婚、上京した。頃日、



ニコライ堂内部



神田ニコライ堂





北川波津とフェオドラ会堂

東京でハリストス正教に接し、明治二五（一八九二）年に洗礼を受けた。しかし、まもなく破婚、明治二八年には正式離縁となった。そして、既述の如く翌二九年、三陸地方の大海嘯で孤児となった子供たちと出会う。次に、東京育成園となった後の経営者として、どのような歩みをたどったか。偶たま新聞記者の取材を受け、その人物評が活字になっているので、まずそれを引用してみたい。

北川刀自は、既に五十歳を越えた中老であるが、一度その蕩然たる温容に接しては、髯面をさげた余でさへも、お母さんと呼びたい位である。院児がこれに懐いてお母さん、お母さんと眞の親よりも慕つて居るのは尤もだと思はれた。<sup>⑨</sup>

取材を通じて育児事業にとって最も大事な条件、従事する者にとつての資質は何かという問いに答えている。対人関係づくりの細やかさや、包擁力といった資質も大切だが、それだけで処遇が進展するわけではない。「院内は悉く家庭組織にして、北川刀自が家母として、これを慈育して居る」<sup>⑩</sup>背景には「家憲」、「家訓」があり、これを護り、養育実績を上げるため職員は一体となつて育児にあたらなければならない。

本院が他院と異なる美点を発見したのは、第一、院児の揃ひも揃つて色艶の宜しき事、第二、院内各室共極めて明るき事、第三、院児は総て他に通学せしめ、院内は純然たる家庭組織で、普通の家庭と変りなき事、第四、院児の為に学資金を何処までも永続する事、此の四ヶ条である。<sup>⑪</sup>

北川が心掛けたのは学業を勧め、能力ある者は上級に進学させることにより、身を立てる方策を具体化したということ。例としては和合平之助のように、東京帝国大学医学部に進み、医師として一家を成した場合があげら

れる。「院内でも多少の学科を教授し」たり、「小学校に通はせ」、「前途見込みのある者」を引きだして、能力に応じた将来像を実現しようとした。処遇規模には常に注意を払った。可能な限り少数者に抑えようとし、「岡山孤児院はもとより、東京のさまざまな育児院、養育院に比べても収容児が少ないことは、波津も感じてはいた。だが自分と幹事桂木の他に二、三人の委員だけですべてをまかなっていたから、院児を余り多くして悲惨な事態が生じるのを懸念していた」<sup>(12)</sup>ことも理由に違いないが、より積極的に少数化を心懸け、一人ひとりの養育にきめの細かい配慮が行き届くよう努めた。一人ひとりの「子供に元気をつけながら、一方には『社会の恩』と云ふものの子供の脳裏に刻み込まねばならぬのですから、なみ大抵のことではありません」<sup>(13)</sup>と述べるように、該施設にとって教育課題は次第に遠大なものになっていく。と同時に簡単明瞭にもなった。すなわち、「私の園児教育の根本方針は極めて平凡であります。正直で忠実な国民が出来上れば、それで満足する」<sup>(14)</sup>。もうひとつ、北川は育児事業こそ女性に適した仕事であると言う。長年の経験から育児は女性なしに行い得ず、一方男性なしでも可能であるから、「児童保護事業といふ方面から見ますならば、其の部門が極めて特殊な性質を帯びて居ります。それ丈けに女性の力がより有効に期待されつつある状況であります」<sup>(15)</sup>という。そして、育児事業の要諦を次の様なところに置いた。

児童保護の方面に於ては其の客体たる児童、主体たる女性の關係に於て極めて緊密なる因果關係あり、特殊性あり、且つ其の方面に當つて女性ならではの美妙なる心境に触れ得ざる幾多の問題を蔵する。<sup>(16)</sup>

今月の初め頃から毎夜寝小便をする二人の男の兒があると云ふことを薄す薄す知られた、いやいや既に熟知して居られた母上



は、今日こそは聊か處置を付けませうと、先づ其の二人と、外に此二人と一しよに寝て居る二人を呼び寄せて叱責せられた、次に又此の月初めから小供番をして居る一人の女子（一七歳）を呼び寄せて、惇々と理を説き情を罩めて攻め立てられた。「一體お前は何と思ひます、此の子供は此月初め、お前が小供番となつた始めから今日二十五日となる今日が日迄、二五日と云ふ長い間毎日毎日屹度寝小便したといふではありませんか。情けないことをして呉れる、何が爲めにそれを私に隠しだして、狐鼠狐鼠と小蔭で片附けて仕舞ふのか、私は既に知つて居ました、けれども今朝は云うて来るだらう、今日は云うて来るだらうと毎日毎朝心待ちに待つて居た、だが此月も最早末になる今日が日まで、何とも云うて来ないのは、一體何う考へて居たのだから、瞭然と云ふて御覽なさい、若しも此の子供を此儘にして置いて、此子供此の病が益々増長して遂に取り返しの付かぬ者となつたなら、何ぞうします、隠し立てにも程がありますぞ、沈黙にも度合と云ふのが必要です。さあ甚々な考だが明瞭に云ふて御覽なさい。凡そ何が辛らいと云ふたとて寝小便の後の始末ほど厭な仕事はありはしまい。その厭な厭な仕事を二五日と續けて黙つて居るとは何にか深い仔細があるでせう、さあ瞭然と云ふて御覽なさい。」と言葉鋭く言ひ放たると、今迄泣き伏して居た小供番は恐る恐る顔を擡げて、聴き取れるか取れぬ位の小さき聲で「私が悪うございました、何うか許して下さいまし、唯だ私が私の責任を盡さなかつた爲めに……子供が小便したので……」「何……お前が責任を懈つたから小供が小便した？ それは又何ぞうした譯で」と母上は又問ひ蒐けられぬ。「はい私が横着をしまして夜起しに参りませんから、それで小供が不調法をしましたので……」と泣く泣く俯伏して詫び入つた。恁くと聴かれた母上の喜びは到底も拙ない筆の描き得ぬ所である。先程より女部屋の彼方に當つて「信さん早く御出でなさいよ、遅くなりますよ」と云ふ聲が何處となく聞えた。今も又聲いと高らかに誰れか女の聲で「信さんお出でなさいよ、早くお出でなさいよ、遅くなりますよ、もう遅くなつて仕舞いましたよ」といふ熱心に口説て居る。其の聲を耳にせられた母上は、直に信子（一六歳）を呼び寄せて、何ぞ恁う遅くなるまで愚圖愚圖して居ました、と問はると信子はしづかに頭を擡げて、「私の親身の兄弟が不調法をしましたのは私の不調法です。竹乃さんの不調法ばかりではありません、それを竹乃さんが叱られてお出でですから、私は本當に御氣の毒で……竹乃さんが叱られてお出でなさるのに私ばかり學校へ参りますのは何だか氣に濟まない様に覺えますので、竹乃さんがお出でなさる時に一緒に参りまじやうと思ひまして、今まで待つて居りました」と涙ながらに申し立てた恁くと聞かれた母上は二度の喜び獨り笑みつつ此の日の仕事に取りかかられた。

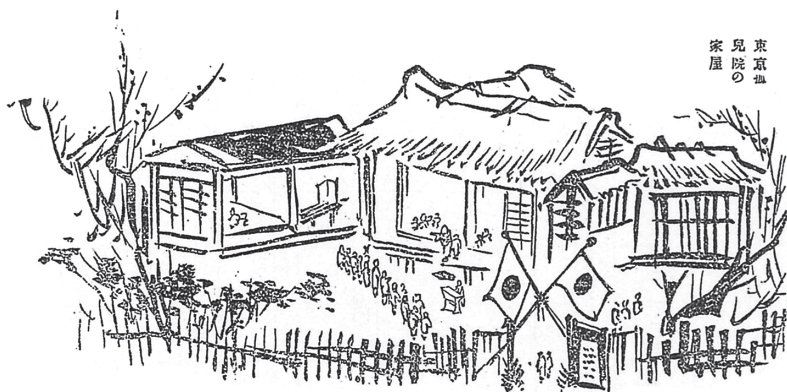


北川波津

移転先の牛込区原町三丁目七五番地はどのような地勢にあつたところだろう。江戸期は牛込村と呼ばれ、正保三（一七二八）年以後旧下戸塚村に編入、延享二（一七四五）年頃までに町家が並ぶようになり、原町と呼ばれ、明治になって一丁目から三丁目に分け、周囲は旧武家地、寺社地が続いた。当時の東京孤児院について、外観を写した写真が残っておらず、雰囲気伝えるものは『東京孤児院月報』（第三五号、明治三十六年一月一九日）に毛筆書きの描写図があるだけ。屋根は茅葺きで、家作は農家の母屋風である。児童は揃いのシマ模様和装を普段着とした。生活の一場面を紹介してみよう。

波津は一〇歳前後の院児たちを連れて近くの縁日に行った。わずかな金のなから子供たちに五厘づつ小遣いを与え、古雑誌「少年世界」を数冊買させた。子供たちの喜びようは大変なもので、「互ひに之れを手にして、鬼の首でも取りたらむが如く」にして院に戻ったという。この後、年長児平之助（和合）の発案で、子供たちは労働してもらつた「賞与金」から毎月五厘を貯えて、互いに話し合つて本や雑誌を買い、小さな文庫を作つた。波津はこれを「五厘文庫」と名づけ、後に院の月報に紹介した。<sup>18</sup>

鬱蒼として牛込の西隅に風は麗に紅葉の裏を通して籬葎の鳴虫詩韻を送つて紅塵を離る一寓居東京孤児院に嗟名譽も身も榮辱も捨てて汲々として熱誠と真情を盡くしてある院主北川はつ子女史及び是れを助けて院内に起臥する桂木頼千代なる快青年、余は茲に讀者に紹介し此の東京孤児院なるものに就て記して見やうと思ふのである。家は葦屋の日本風造りで母屋が二つ庭園を控へ杉の生垣を回らして一寸小奇麗な閑雅な構へ。櫻や桃やさては尾花に女郎花、をほつかながらも四季折々の自然の美がある。庭の一隅にぶらんこ鐵棒を設け是れは孤児の運動場であるのだ。吾は紅村と共に玄關に至つて案内を乞ふと飛白の筒袖着た可愛らしい男の子が出て来て吾等を迎へた。八疊の應接間で暫く待つと、やがて院母北川女史が出て来て慇懃に挨拶せられた。女史は四十の坂を三つ四つ越へた位の年配、黒木綿の筒袖半天に木綿服、極めて質朴な風采に何處となく備はる品格、切下げ髪の根元ゆかしく一閑張りの文机に優然と座して親切に吾等に語るの<sup>19</sup>有る。



牛込区原町の東京孤児院

※『東京孤児院月報』，第35号，明治36年1月。



牛込区原町3丁目付近





ブランコと鉄棒



東京孤児院の園内 (明治34年9月)



東京孤児院



中央：北川波津 後列右より3人目：桂木頼千代  
※『東京孤児院月報』，第35号，明治36年1月。

孤児院幹事、桂木頼千代については丹野喜久子による先業があるので、ここはおおよその紹介にとどめる。明治一（一八七八）年三月、奈良県添上郡奈良町に神官の子として生まれ、明治三一年一月、二〇歳で上京、苦学生となり、社会主義者と交流するうちに東京孤児院を知り、出入りするようになった。二年後の三三年二月、事務員として採用され、かたわら社会主義協会会員となり、幸徳秋水、堺利彦から思想的影響を受けたことは『正教新報』（第五〇七号）の記事に表われている。一方、北川波津の影響を受けてハリストス正教を信仰し、三四年四月、麹町正教会において洗礼を受けた。洗礼名をペートルという。翌年五月幹事となり、北川の右腕となって経営に従事した。彼が中心になって取り組んだ仕事としては、明治三三年四月、『東京孤児院月報』を発刊、毎月一回、一部一銭で配ったこと。これは孤児院活動を世間に広く知らしめ、宣伝効果は顕著であった。やがて経営が苦しくなると、院児による行商を開始、月収一〇円前後の収益をあげた。しかし、前述したように教育に支障をきたすことから廃止、代って北川と桂木は牛乳配達に従事した。こちらも労働量のわりに収入が少ないため、しばらくして止めている。徐々に賛助会員が増えたことで、どうやら経営のめどが立つようになったからである。この後明治期には、臨時預児部を三回実施している。第一回は明治三七年三月、日露戦争に出征した家庭の遺児を、第二回は明治三九年二月、東北地方の凶作によって生じた孤児を救済するため、第三回は明治四三年三月、千葉県、茨城県沿岸を津波が襲い、罹災孤児が多く出現、それを收容保護した。

第一回臨時預児部規則（第一条）

預後備の陸海軍籍にある、貧窮者にして応召又は出征のため養育し難き者の子女弟妹を預り、其父兄に代りて養育教導をなす。

第二回臨時預児部規則（第一条）

明治三八年度に於ける東北凶歉地方、即ち福島、宮城、岩手の三県民にして凶歉の爲め、養育し難き者の子女弟妹を預り、其の父母婦に代りて養育教導をなす。

こうした事業を推進した桂木は明治三六年七月、偶たま腸チフスに罹り、いったん治癒したものの、以後はたびたび病臥の身体となり、やがて肺患に冒された。赤坂区氷川町の赤坂病院に入院、鋭意回復に努めたが、かいたくなく明治三八年一〇月三日、二六歳の若さで逝くなった。将来を嘱望し、片腕となる存在を失った北川の悲しみは深かった。非戦、平和と慈善事業の関わりに言及した桂木の思想、主張は、今日見ても注目すべきもので、桂木（雅号は伴水）によると、戦争こそ慈善事業の対象を一举に、大量に生み出す元凶である。慈善に熱心な者が、好戦的態度を示しているのはおおよそ矛盾した態度で、むしろ戦争反対に勝る慈善事業は無いという主張を掲げた。

さて、筆者としてはここで、丹野喜久子の桂木頼千代論に対するコメントを綴ってみたい。

桂木が採り上げた課題の多くは、「彼（桂木）一人のうちに意義化され、悩まれている」と述べ、このことは桂木の背負った時代的課題の大きさを示しており、「頼千代を時代の切片とみたて、これを解明していく」ことの必要性を指摘された。しかも、それは個人史のレベルのみならず、やがて「歴史的限定性を越えた普遍性を内包した課題」に直結するだろうと予想している。私には桂木個人は、様々な時代的テーマを自己一身の上に背負い、かつそれを消化し、実践の方法論を見出そうと苦悶し続けたこと、そのことに独自の意味を見て、実践方法論を見つけようとして苦闘を続け、そのことに独自の意味があると考ええる。漱石の作品に登場する、近代の内



面世界と関わりを持つようなタイプを、明治期慈善事業として、はじめてここに見い出したのである。ひとつのテーマから、別の、新たなテーマに移行、飛躍していく実践家、あるいは古きを捨てて、新しきに移っていく、その架橋に関わる実践家を見つけることは、今日ではさほど難しいことではない。「社会主義者」を例にとるなら、片山潜はその典型で、彼にとって神田・三崎町からモスクワ・コミンテルンに至る道程は、そのまま慈善活動から政治運動への移行、飛躍を示し、「宗教家」を例にとるなら、留岡幸助はその「架橋」において古い皮袋に、いかにして新しい酒を盛るかというテーマを追いつけた一生である。つまり、片山を何々「から」何々へ、というような、その時代のテーマに応じて自身を適応させていったタイプとみるなら、桂木の場合は、何々「と」何々、という重層的思惟様式を持ち続けた実践思想家であり、その思想内容の多様性、多義性から多くのことが学べるように思う。そこで話題を上げ、実践における両義性について考えてみたい。

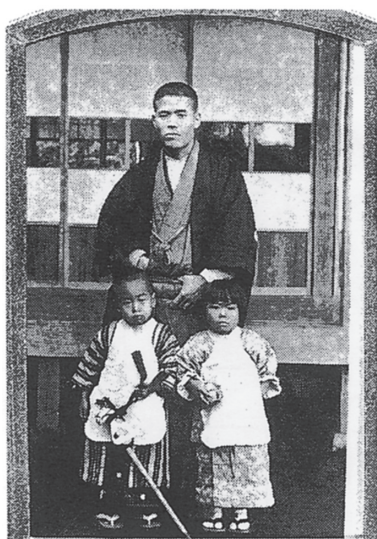
ではこの両義的性格を分かりやすく説明するには、何をたとえとしたら良いか。例えば、赤十字の従軍看護婦のような存在はどうか。戦場にあつて敵、味方の区別なく傷病兵の治療、看護に衝たる活動は、実践における両義的性格を示している。彼女たちは、いつ相手から殺されるか知れないという危険を前提として、また殺されることを了解した組織に所属した実践である。つまり殺し、殺されることを前提に、生命の尊厳を理念として救済活動に従事する。考えてみれば、これほど矛盾した実践はない。こうした在り様を仮に両義的实践と呼んでおこう。丹野の報告によると、「慈善の立場より哲学に戦争を評論せんと欲し、本紙一面大の論説を草して、本欄に編輯し、すでに印刷にまで附したるも、時局は我等をして今、其論文を公けにする時にあらざるを覚らしめたり……依て本号校正の際、其の全文を削除したり」（『東京孤児院月報』、明治三十七年二月一七日）とある。この文章を

理解するためには、ニコライ主教の「教書」を脇に並べてみなければならぬが、『近代日本総合年表』（岩波）によると、「2・11 ニコライ主教、日露戦争について正教会の全信徒に教書を与え、日本国民としての忠義の自分を尽くすよう諭す」（『正教新報』、明治三十七年二月二十五日）とあり、ハリストス正教と特別な関係にあった東京孤児院の職員として、大きな試練の場に立たされた。主教の「教書」が出ると、寧日を経ず「全文削除」を行わなければならなかった、そのあわただしさから桂木の惑いを読み取るとは難しいことではなく、かつ、苦悩の一刻を経た後、新たな決心をしている。翌三月一五日の『月報』は、「戦争と慈善」と題し、「凡そ世に戦争程非慈善の大なるものはあらず。多くの壮丁はこれが為に殺され、多くの廢者は、これが為に生じ、多くの老者は、これが為に扶養者を失い、多くの妻女はこれが為に寡婦となり、多くの児童はこれが為に孤児となり、あらゆる人生の悲哀苦痛は、これが為に起り来る」と指摘、続けて「慈善を説く者は、飽くまでもこれが絶滅を願はざるべからず、之れ吾人の職分なり」と述べる。桂木は自己の「職分」とその延長線上に、「慈善」と「戦争」を据え、非戦論を展開しているわけで、先に従軍看護婦を例としたのは、桂木の非戦論が、同時に次の様な実践論を包摂しており、「陸海軍籍にある貧窮者にして応召、又は出征の爲養育し難き者の子女、弟妹を預り、其の父兄に代りて養育指導をなす」臨時預児部の開設を宣言しているからである。これは軍事援護事業で、「戦争反対」と「軍事援護」は桂木の実践思想のなかに同居している。文字通り受け止めれば人格の分裂であり、思想的な破産とみることができないわけではない。しかしここにはもう一つの解釈が可能で、ヒントとなるのが内村鑑三の主張である。

よく知られるように、内村がその非戦（反戦）論の故に、幸徳秋水や堺利彦等と万朝報を退社したのは前年の

明治三六年一〇月一二日のこと。非戦と慈善の關係について内村がくだした結論は、三八年九月に「秋の到来」と題する文書を発表したところに現われている。「私（内村）は今まで、いろいろの慈善事業を研究し、またこれに手を出してみました、しかし、戦争廃止を目的とする平和主義にまさりて善かつ大なる慈善事業を思いつくことはできません。これに比べて見ますれば孤児救済事業も、悪少年感化事業も、動物虐待防止事業も、その他ありとあらゆる慈善事業はいったって少なる事業であると思ひます」と述べた。しかし、いったん開戦になると、すみやかに終戦となるための「祈り」と、軍人遺家族の救済を説くようになる。すなわち、桂木より一年早く非戦論を展開しながら、慈善」と非戦の内在的関連性というテーマに到着したのは、桂木よりも一年遅れた明治三八年であるということ。次に、内村の場合は終始「之れ吾人の職分なり」という、文筆活動のなかから抽き出された結論である。一方、その実践は、桂木の「時局の影響に対する我院（東京孤児院のこと、引用者）の覚悟」（明治三七年六月一日）から確かめることができる。

桂木が「余は視捷に賛同せず」（明治三七年九月一日）というのは、九月四日、勝利のうちに終った遼陽の会戦を指し、橘中佐の奮戦が巷間に広く伝えられ、いやが上にも好戦的雰囲気か沸騰しているさなかの発言で、後日歴史はこの会戦で死傷した日本軍兵士の総数を二万三、〇〇〇余人と伝えた。この「死傷」にまつわる生活困難、国民的悲劇を戦いのさなかに底辺社会から見据え、かつ自己の課題（戦傷死者救済）として引き受けたのが桂木の選択であった。実践思想家としての片山潜は、両義性に耐えた人物ではなく、何々「から」何々へ、移行、飛躍することによって、歴史上の人物となった例であるのに対し、桂木は、何々「と」何々という、迫り来る課題に、次から次へ「と」と、結びつけ、抱え込みつつ最後まで実践の「場」を離れようとしなかった生涯である。



桂木頼千代と園児

このような、両義性に耐え続ける実践主体こそ、最終的に戦争被害者の砦となって、社会の底辺で苦しむ人びとの生活を護り続けたことになる。

桂木の残した「院内児童保育日誌」をみると、一人の少年が登場する。「院の長児平之助は、先頃院母の前に来り、『お母さん、他人は僕等の事を孤児だ、孤児だと言ひますが、僕にはお母さん（院母のこと）あるし、兄弟も大勢あるから孤児でないと思ひます』と、左も不満らしく言ひ出でたり。吾は彼が自然に出でた

る此の言葉に、一種言ひ難き感に打たれぬ」とある。次頁に平之助の習字を掲げておくが、学校では「北川」姓を名乗らせた。こうした例は珍しいことではなく、「収容したる無籍児兩三名の如きも、北川の姓を附して就籍したり」<sup>(20)</sup>。平之助の場合は身元が判っており、岩手県下閉伊郡船越村七七番地、両親の姓は「和合」という半農半漁民。明治二〇年四月一日に生まれ、三陸地方大海嘯で一家全滅、彼だけかろうじて生き残った。彼は後に遭難体験を語り、文章に残している、その例として明治三五（一九〇二）年一月、『東京孤児院月報』に載せた文章を、次に紹介してみよう。

私は東京孤児院の小供の平之助でございます。私が大海嘯にあった事を少々お話しいたしまし（せ）う。去る廿九年の五月五

# 君不は忠 親不は孝

北川平之助

和合平之助の習字（明治32年5月）

そ耳に入りて光景は今悲絶の頂頭に達しぬ。

僕等の家は日本一の都、東京市の牛込區原町參丁目七拾五番地に在て東京孤兒院と稱するのである。家には母上と、祖母と、姉さんと、兄さんとが大人で、外は小供で皆んな兄弟である。人数は大人が五人で小供は廿二人、合せて廿七人の家族である。母上は家一切の事を司どり、祖母さんは小供の世話をしたり、衣服を縫ひ、姉さんは炊事と衣服の事を司どり、今一人は他から機を織りに來て居るのであるが、ヤツパリ姉さんである、兄さんは小供の教育の事と月報の事を司どるのである。其他、小供の内でも大きな者には受持があつて、僕は文庫掛と月報發送の事もする。（中略）其れから毎日の事は、朝六時に起床してみんな受持の掃除に係り、女は臺所で働く、小さい者は外で鐵道唱歌だの、楠公の歌などを歌ふて運動する、一番小さい弟二人も母上の床から出でて同じ様に小さい手を振て運動場へ行き、多くの兄弟と共に廻らない舌で歌を唄ふのが何よりも面白い、僕等も掃除を終へてから運動する。夫れが終て顔を洗ひ、皆集て祈禱をし、終て兄さんの道の双紙の講義を聴き、其れから朝の挨拶をして御

日（舊）の大海嘯は、午後の八時頃より大地震がはじまりて來ました。ソウして三十分ばかりヨツて居ります（し）た。ソウして三十分過ぎると、海の方から波がゴウゴウと鳴つて來ました。ソノ音は雷を千も合したよりも大きな音でございました。ソウして居るうちに、他の人がツナミだツナミだと云つて騒いで村中を廻つて歩きました。其時お父つあんは……海の方を見に行きました。ソウして居る内に家内中は、皆家の火をけして外に立つて居りました。ソウシ（す）ると、お父つあんは……半分道で、歸つてきました。驅けて來ながら……逃げる逃げる……。談干茲至りて途切れぬ。怪みて傍より顧れば彼は歎歎泣泣し居るにてありき。満堂の人、誰か目にも涙うかみ、水を打ちたる如く沈み反りし其靜肅の中より女生徒の貫泣する聲のみ



# 東京孤兒院月報

## 第四拾九號

### 東京孤兒院概要

●所在地○東京市赤坂區青山町六丁目百〇五番地  
 ●創立○明治三十二年四月○創立者 北川はつ  
 ●目的○慈善事業の大體に基きて無智の孤兒又は貧窮遺兒を收容し之れに人の子として愛へべき養育を興へ獨立自活の人たらしむるを以て目的とす  
 ●組織○院内は凡て家庭組織にして成るべく世と隔離したることを避く  
 ●教育○收容見込にして學識に達したる者は小學校に入らしめ前見込ある者は漸次高等の教育に就かしむ  
 ●其他の者には各々其の性質に應じて實業教育を授け院内にありては特に徳性の啓蒙に務む  
 ●維持○天祐の下に院内外各員の勞動と内外同情者の協力及び寄附金品と本院基金の利子とに依り永久に維持擴張す  
 ●入院児童格○孤兒又は貧窮遺兒を收容して十四歳以下及びは入籍國籍の如何を問はず之れを收容す

### 本號要目

月報▲戦争と慈善……………記  
 論說▲拂へ心の雲……………安藤 曲川 著  
 感懐▲我が水に飲ばん……………伴  
 全集▲櫻の池……………宮澤 香村 著  
 空傳▲オマリード嬢(承前)……………鈴木 三郎 著  
 寄書▲殺人器……………坂井 橋三郎 著  
 家庭▲癡癡學生……………Fクトル 五木 生  
 交遊▲吾輩……………山田 枯柳 著  
 全集▲不知恥……………渡部 虹衣 著  
 全集▲血盟……………宮澤 六郎 著  
 子供▲院内児童保育日誌……………院内の一女子  
 全集▲西洋人の姉さん(通)……………院内のかき子  
 院報▲臨時預兒部の開致▲老衰者の入院▲慈善會の見合▲寄附抽籤會▲感謝▲井口氏の慈善會附△四年諸氏の助力其通

## 東京孤兒院月報

### 戦争と慈善

凡を世に戦争程非慈善的の大なるものはあらず。多くの壯丁はこれが爲めに殺され、多くの養育者がこれが爲めに生じ、多くの老者はこれが爲めに扶養者を失ひ、多くの妻女はこれが爲めに寡婦となり、多くの兒童はこれが爲めに孤兒となり、あらゆる人生の悲哀苦痛はこれが爲めに起り来る。吾人は常に慈善の熾んらんすることを願ふだけ、夫れだけ深く戦争の慘事を悲しむざるを得ず。更にこの悲惨なる戦争が一日も早く世に絶滅せんことを希はざる可からず。假令政治家は其の利を説き、學者は其の正義を説き、教育家は其の武勇を稱し、宗教家は其の避くべからざる所以を教ゆるも、吾人慈善を説く者は飽までもこれが絶滅を願はざるべからず。之れ吾人の職分なり。

然れども世がこの戦争を絶滅するに到らざる間は、吾人は單に其の慘事を悲み、其の絶滅を願ふてのみあるべきに非ず、戦争の行はるゝ時には其の戦争の爲に死せる人々及び其れに因て生じたる所の哀れなる人々の上に深き思ひを致し、其等の人々を爲めに大いに慈善の手を擴げざるべからず。これ戦時に際しては何人も爲すべきことにして、殊に慈善家の大いに覺悟を要するることなり。

然るに戦時に於ける人々を見るに、學者も、教育家も、宗教家も乃至は慈善家も戦争其の事にのみ心を奪はれ、戦争に因て生じたる哀れなる人々には一向に同情なく、其等の人々を如何にすべきかに就ては更に考へ及ばざるが如し、これ眞に憂ふべきことに非ずや。此の如んば人の人たる靈性は何所にか認め得べきぞ。(伴水)

※『東京孤兒院月報』、第49号、表紙。

飯を食べる。朝飯は毎日白粥であるが、是れは五、六年前の困難を忘れない爲めである。其れから皆自分の仕事に係り、僕等は自分の室で勉強し、女の者は後を片付けてから勉強する、夫れから時間が来ると學校へ行くのである。小供で學校へ行く者は中學校一人小學校十一人、夜學校一人で、外は小さいから内で遊んで、時々はお話を聴かせらるのである。正午には僕等も歸て来て御飯を食べる、僕等は兄さんがお給仕して、女の者は十二歳の妹がお給仕をし、外の小さい者は姉さんがお給仕して、極小さい者は母上がお給仕して皆共に食べるのである。午後には又學校へ行つて三時頃には皆共に歸て来る、夫れから母上に何か菓子でも戴て食べる、夫れからは文庫の本を見たり、ぶらんこに乗ったり、機械体操をしたり、或は自分の庭へ行つて木を植へたりして、夕方には又御飯を食べる、其れから女は後片付をして、僕等は大勢で水野原へ運動に行つて、戦の眞似杯して歸て来る、夫れから神様に祈禱して又た話がある、其れが終ると十歳以下の者は寝て、外の者は皆一室で仕事をする、僕等は紙を断て糸にするし、妹等は裁縫の手傳して、母上は帳面を調べたり裁縫の仕度したりして、姉さん等は裁縫する、其れから其日の内の事に就て母上のお話を聴せらるのである。八時半には其の事を終て直ぐ又別に仕事をする、これはお金を取て僕等が善を行ひ、憐れな人に恵む資本とするのである。九時半には終て一同床に就く、これが毎日の事である。浴場は一週間に二度で水曜と土曜に内で風呂を立てるのである。夫れから病人のある時は皆で親切に看病するが常である。夫れから又内には機械部があつて毎日機を織て居る。月に一度は新聞も發行する。夫れから文庫もあつて種々な書物が澤山にある、僕等が勉強するには大變便利だ。是れは僕等が初め立てたのだが、他所から澤山に寄附の本があつたので今では余程澤山になった、このあいだも本の入れ所がなくなつたからお母さんに願て箱を買つていただいたのである。僕等は余暇に文庫の本を読むのが樂みだ。夫れから風琴も笛もある、僕等休みには彈で樂むのだ。ラルガンは欲しいけれども未だ内にはない。日曜は皆休みで教會へ行く、夜は内中で面白いことをして遊ぶのである。土曜には反省會をして、皆が一週間に亘つたことを考へてお話するのである。僕等には又庭があつて、種々の樹木を植えて置く、若し僕等の行いに善いことがあれば、又木を貰へるので、悪い事があれば植えて置く愛木を楸られるのである。夫れであるから善い行いをする者の庭は木が茂て、悪い事をする者の庭には木の楸つたものがあつて、何日迄も其のあとが残つて居る。夫れだから僕等は楸られるのを非常に恥として居るのである。此の様にして今に僕等は豪る人になるのである。<sup>21)</sup>

平之助は上級學校に進み、東京帝大医学部に入学、志望動機について尋ねられた折、「経済的理由などで院児

が病氣になったときも、十分な治療を受けることが出来ないから、その助けをしたい、貧乏な人からは治療代を取らずに診てあげたい<sup>22)</sup>のだと語った。在学中、貧しい身なりのこの医学生に目を止めた長与又郎教授が話を聞くと、こうした事情のあることを知り、後に平之助を推薦し、アメリカに留学させた。帰国後、初志を貫くため、東京育成園にほど近い土地を選び、駒澤病院を開いた。昭和五（一九三〇）年のことである。北川は六五歳の秋以後、神経痛、リュウマチが悪化して病臥の身をかこった。そこで和合は、北川の主治医となって治療に努めたが、数年後に自身が胃ガンを患い、結局北川に先立ちこの世を去っている。さて、話は戻るが、明治四四（一九一一）年五月五日刊『育成園小史』に編者の名を残す座間勝平について。大正八（一九一九）年五月二〇日刊『回顧二十年』の編者も、同じ座間勝平である。雅号を「北邨」と称したこと以外、今日では個人的消息がほとんど知られていない。偶たま『東京朝日新聞』（明治三九年五月一三日）に、「事務員座間氏は院の経済的保護をなし」という一節が出ており、どうやら事務員であつたらしい。明治三八年一〇月、幹事、桂木頼千代が逝く<sup>23)</sup>なつた後、北川を助け、事務を担当したのは、この座間であつたかも知れない。長谷川重夫によると、「育成園は大正七年に公益法人の認可を受けている。当時は労働運動が盛んになっていく世相のもとにあつたが、経営の上ではいろいろと苦労が多かつた。そのなかで、座間勝平が大きな役割を果していた<sup>24)</sup>」らしいという。『東京孤児院月報』（第六九号、明治三八年二月二五日）に座間の個人的消息に触れた文章が登場する。

神よ仰ぎ願くは大慈大悲の御心により、若うして遠く主を離れ、孤影漂然、大海原に往へる吾人を潤み給ひて、少しく吾人の言に聴き、以て吾人の憂悶を解かしめ給へ。



つまり、座間はその精神的煩悶からハリストス正教会の門をくぐり、やがて北川を知り、孤児院に勤めることになった。別の資料として『使命新報』を括ると、下野国那須郡烏山町にある烏山正教会、伝教師山田蔵太郎、聖名ワシリーという人物が登場する。彼は新潟県柏崎町出身、東京孤児院を支援し、遊説、慈善会を通して大いに協力した。今日、東京育成園に残されている資料のなかに一通の書簡があり、菊地恒雄発、長谷川重夫宛（二〇〇三年七月一六日付）。これによると菊地は座間の孫で、勝平が昭和四八年に他界するまで生活をともにしたことが記されている。なかに勝平から聞いた話として、幼いワシリー即ち山田蔵太郎を孤児院に収容、後に伝教師として聖職者になるよう導いたのは座間であったという。仮りに収容した時期を明治三九年前後、年齢を二〇歳初頭とみれば、優に九〇歳の長寿を重ねたことになる。しかし、松島が活躍する時期に座間の名はどこにも登場しない。次に書簡の一部を引用するが、松島との関係が見えてこない理由のひとつとして、筆者はハリストス正教会と、松島のプロテスタント・キリスト教の間に宗教関係の齟齬があったかも知れないと想像する。

育成園草創の頃につきましては、生前の祖父より折りに触れ、聞いておりました。子供心に忘れられなかったのは、洗礼名ワシリーといわれる方のことで、祖父がその方を拾い、育成園で成長され、立派な社会人、家庭人として活躍されたことです。その方はニコライ堂の祭礼日に施される彩色玉子を持たれて、よく私どもにそれを下さいました、と。

## 註

(一) 中村健之介、中村悦子『ニコライ堂の女性たち』、教文館、二〇〇三年五月、一六九頁。

- (2) 中村健之介、中村悦子、前掲書、一六八頁。
- (3) 『使命新報』、第六号、明治三二年五月一日、五頁。
- (4) 東京孤児院設立趣意書、明治三二年五月。
- (5) 北川波津「思出」、『社会事業』、第一〇卷九号、大正一五年一二月、七七頁。
- (6) 太田宙花「東京孤児院」、『中央公論』、第一九年二〇号、明治三七年三月一日、八一頁。
- (7) 『東京育成園園報』、第二二四号、大正一四年五月、四〇五頁。なお、「ソフィア」と出てくる聖名は間違いで、「フェオドラ」が正式名称である。
- (8) 中村健之介、中村悦子、前掲書、二〇二頁。
- (9) 『東京孤児院（中）』、『東京朝日新聞』、明治三九年四月二七日。
- (10) 前掲紙。
- (11) 『東京育成園』、東京育成園、明治四〇年二月、二五五頁。
- (12) 中村健之介、中村悦子、前掲書、一九五頁。
- (13) 北川波津、前掲書、七七頁。
- (14) 同書、七八頁。
- (15) 北川波津「自覚したる女性の進出すべき時」、『社会事業』、第一二卷一、二号、昭和四年三月、六一頁。
- (16) 北川波津、前掲書、六三頁。
- (17) 『東京育成園』、東京育成園、明治四〇年二月、一四〇～一四二頁。
- (18) 中村健之介、中村悦子、前掲書、一七七頁。
- (19) 上條霞溪「東京孤児院」（一）、『東京孤児院月報』、第三二号、明治三五年一月一日、四頁。
- (20) 『東京育成園』、東京育成園、大正六年四月、六頁。
- (21) 『使命新報』、第一三号、明治三二年一二月一日、五頁。『東京孤児院月報』、第三二号、明治三五年一月一日、四頁。
- (22) 長谷川重夫、インタビュー録音、東京育成園所蔵。

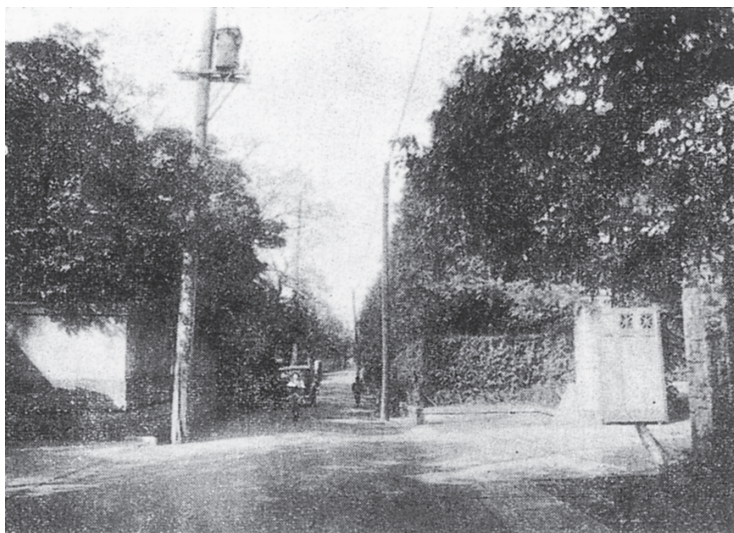
(23) 長谷川重夫、前掲インタビュー録音。

## 二 孤児救済の展開と施設の充実

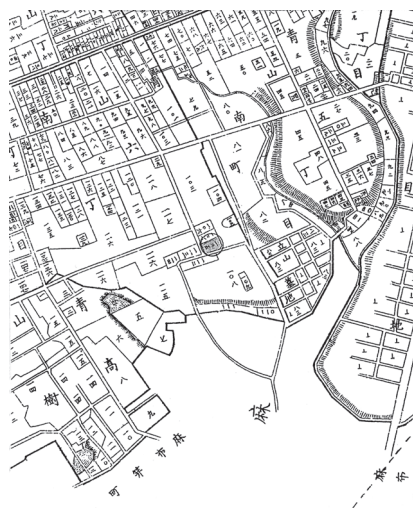
明治三六（一九〇三）年三月二八、二九の両日、東京、神田錦町の錦輝館で「慈善美術展覧会」が大々的に開催された。結果は大成功、売り上げも一、五〇〇円を越す利益があった。そこで北川はこうした財政的余裕を踏まえ、牛込区原町から移転、赤坂区青山南町六丁目一〇五番地に新築の園舎を設けることにした。明治三六年一〇月、総工費四、七〇〇余円かけて完成したが、借入金も二、三〇〇円残った。青山南町は青山墓地に程近く、江戸期には青山与力組同心が所有、明治以後は軍人の役宅が多く、その間に徳富蘇峰のようなジャーナリストの家宅もあった。移転の三年後、青南小学校が近隣に設立、学齢に達した園児はここに通うことになった。日露戦争が始まると、育成園は軍人遺家族遺児を預る「臨時預児部」を開設したが、収容面積には余裕があった。日露戦後の東京育成園を紹介した記事が『東京朝日新聞』に掲載されているので、次に一部を紹介してみたい。

院は青山南町六丁目一〇五番地に在るので、青山行の電車に乗ると青山四丁目の最終点で降り、其通りを一直線に師範学校の前を通り、六丁目の凱旋門から左に折れて、真直に三丁半も行って突当る左側の家がそれである。（明治三九年四月二十四日）

門より左側の一屋で五厘書庫と銘打つてある。これは寄贈の書籍を集めた此院の図書館で、両方の書架に和漢の新本古本が沢山積んである。……応接室に充ててあるが、卓子が真中に在って一方には院児の製作にかかる工芸品、美術品が飾つてある。……



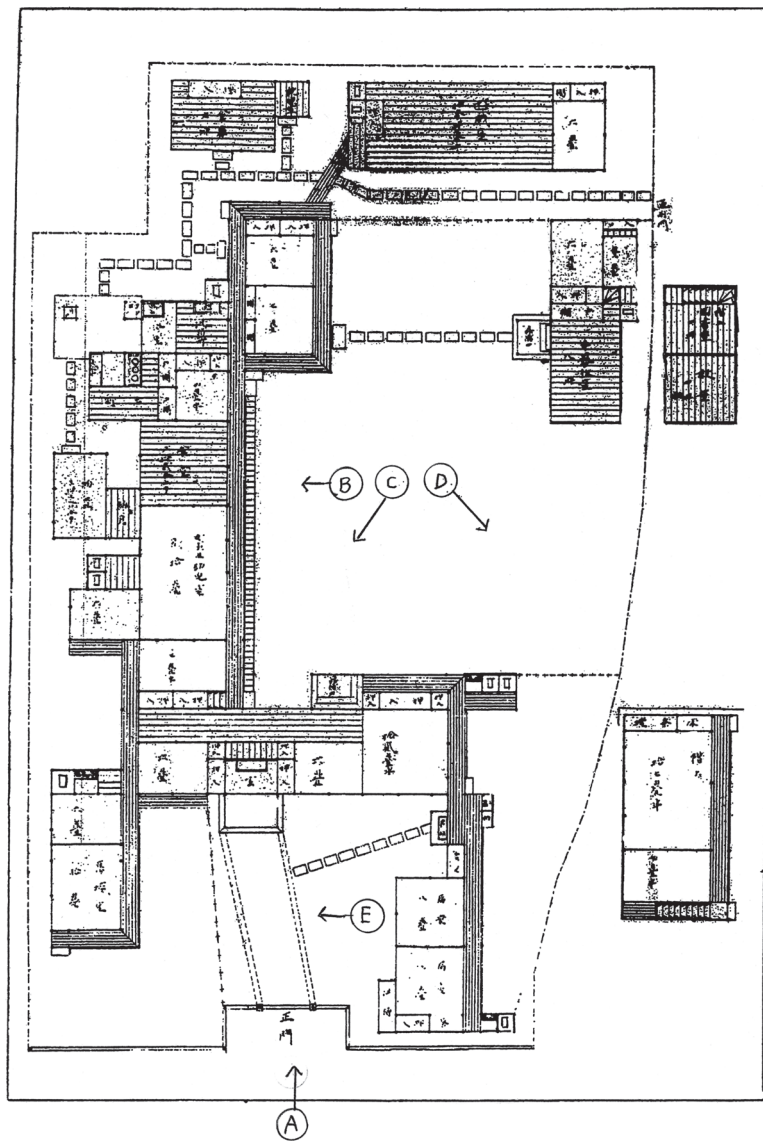
青山南町6丁目住宅街



赤坂区青山南町6丁目105番地（明治37年）

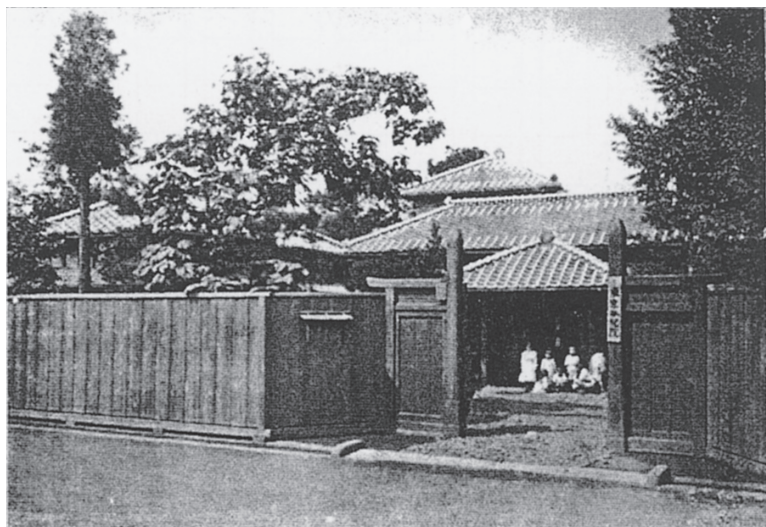
東京育成園全図

回想の松島正儀 (一)



※『育成園小史』，座間北郎編，明治44年5月。  
 ※(A)～(E)は次頁以降掲載の写真撮影場所。





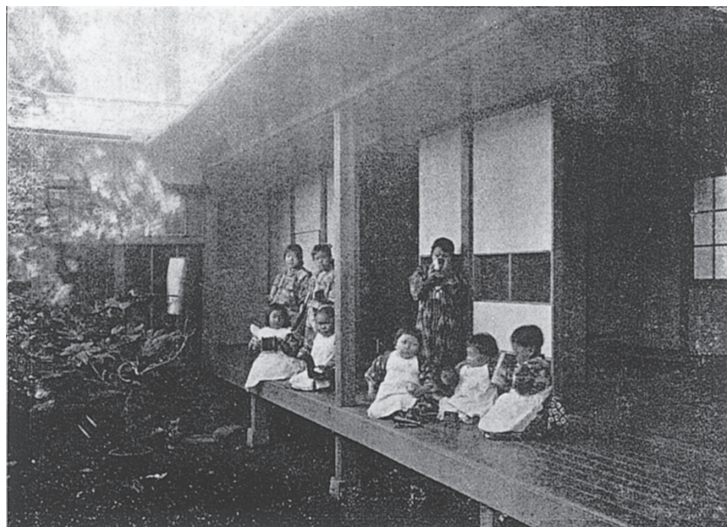
写真A

※『東京育成園』，東京育成園，明治40年2月。



写真B

※『東京育成園月報』，第10年1号，明治42年1月。



写真C



写真D

※『東京育成園月報』，第9年1号，明治41年1月。



写真E

女子には院内で機を織らせてゐるものもあれば、実践女子校杯に通はせているものもある。（明治三九年五月四日）

明治四〇（一九〇七）年三月二一日、東京、上野公園を会場に第六回東京勸業博覧会が開催された。この時、東京育成園も応募出品、園児の作品を発表した。作品の製作事情に触れるなら、明治三二年八月以来、園内には機織作業場を設け、機織工部と名づけ、女子園児に技術習得を行なわせたが、専門の指導員を招いて高度な機織を習得させた。指導員の名前で今日残っているのは内田かね。『使命新報』（第八号、第一三三号）によると、適宜外部の注文に応じて製作、ほとんど市価に近い値段で販売したという。概して評判が良く、売り上げ数も少なくなかったから、園にとつてはやがて収入源のひとつになった。この女子園児による手織作業は、次つぎとジャンルを拡げ、「美術造花各種、押絵各種、織物各種」となり、多くの作品を生んだ。やがて「手藝部」となり、





四戸多希能の出品作、造花四季花籠

受賞、褒状授与となり、慈善、感化、授産業部門の成績は東京育成園が第一等であった。なかでも実践女学校造花部を卒業した四戸多希能（四戸竹乃子）の造花四季花籠、同じく実践女学校四年在学中の島田園子の押絵衝立は皇室買い上げとなった。ちなみに四戸多の作品には高額、九五円の値がついた。

翌明治四一年二月、育成園賛助委員会は東京の外に支部を開設する決定を行った。それは千葉県から送られてくる委託児童が多かったこと、また千葉県の賛助員が八五名と多数であったことから、そこに協力を求めつつ同年九月五日、千葉県安房郡北条町北条字新塩場一六〇四番地に一〇〇余坪の土地と二〇余坪の家屋を借りて開設した。中心となった主任職員は光田鹿太郎。他に保母を一名採用し、児童は最初一〇余名で始めた。光田の努力もあり、大正二年（一九一三）年一月三日、六一坪の増改築が落成した時の敷地は五三四坪に増えた。開設二年後の四三年三月、千葉、茨城両県の太平洋沿岸を津波が襲い、罹災孤児が出た際、育成園は早速第三回臨時預児

更に本格的な生産態勢を整えた。毎月発行する『月報』を括っていくと、広告欄に「園児製作品販売」という見出しで、「織物には紙布綿布等ありて、殊に紙布は本園の特産物にして、夏向帯地単衣地合羽等頗る好評なり。其他織物は御好み次第御注文に応じ、質織の御依頼にも必ず」という一文が出てくる。<sup>1)</sup> こうした実績のあるところへ、勸業博覧会の開催通知が届き、園としては自慢の染織、刺繍、紙布織、押絵衝立、造花四季花籠を出品した。結果は大半が

部を開設、孤児収容にあたったが、この時千葉支部も救済活動に加わった。また、東京より氣候の温暖な千葉に本園の虚弱児、病児を移して保養にあたらせたこともある。さて、光田鹿太郎について。彼は明治一三（一八八〇）年三月一〇日、岡山に生まれ、成人してからは岡山孤児院に勤めた後、東京に出て鎌倉保育園に勤めたキリスト教徒であるが、東京育成園に就職した時、既に千葉支部開設の話は進んでおり、そのままこちらに赴任した。その後、大正二（一九一三）年の在院数は一六名、退院数は二名、翌三年の在院数は一六名、退院数は三名、同四年の在院数は一二名、退院数は二名である。やがて大正五年五月、千葉支部を分離、独立させ、光田に経営を委せることにした。この時、どの様ないきさつがあつてそうなつたのか、今のところ資料は出ていない。この後、千葉県育児園は県立施設に代わり、キリスト教民間事業としての役割を終えている。

駒沢分園の設立事情に触れてみたい。まず尋常小学校四年、松島正儀少年の作文がある。

駒沢の新しい家はどんとできてきたそうで、僕等はそれをきくのがいちばん嬉しい。こないだも家の地所にできた水瓜をいただいた、ずいぶんうまかつた。早く田舎へこしたら僕らもはたらいでもっともっと大きな水瓜や何かを作りたい、ああ嬉しいなあ、早く田舎へいきたいなあ。

分園が出来、やがてそこは本園へ代つていく。駒沢という田園地帯について地勢に言及してみると、分園が完成した二年後の大正五年、駒沢村農事調査が行なわれ、その報告によると、「本村は従来より純然たる農村にして、専ら農によりて会計を営みしもの殆んど大部分を占め、商工業に従うものは甚だ少ない」ことと、その農業の「法たるや一般に父祖伝来の固陋なる方法に泥勢み改良進歩に見るべきもの」はなかつたというから、東京近郊の農

村としてとりたてて特徴があつたわけではない。<sup>③</sup>ところが第一次世界大戦を契機に、都市化が急激に進むところもその影響を受けて稲作地から、都会生活者の食卓に必要な野菜の供給地に変つた。さらに、交通網が拡大、整備されたため、都心から移り住む人びとの住宅地に変わり、ここ駒沢も私鉄玉川線が開通すると、近辺の風景は急激な変化を見せるようになった。明治三一（一八九八）年に四、一〇〇人であつた人口が、大正七（一九一八）年には八、五〇〇人に増えている。その後も大正一二年に一万二、七〇〇人、翌一三年に一万七、〇〇〇人と著増した。もうひとつ、同地域は陸軍の兵営が設けられ、付随する施設が建ち、その傾向は世田谷全体に及ぶようになった。分園の所在地を「上馬」と呼ぶ由来は、ここが上馬引沢という丘陵地の一角にあつたことにより、それが町村編成にもなつて五カ村合併により駒沢村が成立したため、大字上馬引沢となつた。昭和七（一九三二）年一〇月、市域拡張にともない世田谷区が成立すると、さらに上馬一丁目と名称を変えている。こうしてみると、少年松島が「田舎」と呼び、「水瓜」が穫れたと書いているのは当然で、周囲は既に近郊野菜の生産地であつたし、広い敷地の一部は畑に代えて麦や作物を实らせている。大正七年七月の『東京育成園月報』を開いてみよう。

もう麦のとり入れもすみました。今年は麦はできがよくて沢山取れました。サツマイモもよく育つてゐます。ジャガイモもよくでき、キウリやナスもできました。畑へ行つてオイモを掘つたり、ナスを取つたりして、それを食べるのはおいしいものです。毎日楽しいお百姓をしています。<sup>④</sup>

さて時期は遡るが、分園の成り立ちから、その後の運営に触れてみよう。青山南町は典型的な住宅地であつた。園児の成長と増加により、やがてそこは手狭となり、市街地化の影響で居住性にも問題が起るようになり、分園

設立の構想が北川の頭の中でまとまり、土地の選定にあたるようになり、青山からそれほど遠くなく、周囲が田園地帯であることが条件とされた。元もと牛込原町から青山南町に移転する際、当初条件のひとつに「今の駒沢あたりのように、未だ人家稠密でなく、育児事業を営む上に於て極めて格好の場所」<sup>(5)</sup>であったこと、「園児の保健と教育のことを考へて」分園設立に動いた。青山と駒沢の間には電車の便もあり、往復するのに便利であった。あわせて環境の変化も子供たちにとって良い刺激となった。

いきいきした若草の上で、まぶしい暁に向ひ、私は思ふぞんぶんに呼吸した。新しい清らかな朝の空気をスイスイと吸い込む心地よさは、言葉では言はれない。まるでからの血潮がとけるようだ。今まで霜がれていたうらの知は、今は青々と秩父の山まで続いてゐる、もう春も過ぎて夏が来るのだ。<sup>(6)</sup>

二、三九〇坪の土地を五、九七五円で購入、ここに園舎建築をはじめた。費用は公的な下付金、助成金を別にすれば全て民間からの寄付金に拠った。さらに慈善音楽会や帝国劇場を使った慈善演劇会を前後五回行ない、慈善演劇の収益だけでも一、一九九円九六銭に上っている。また、一坪二円五〇銭の指定寄付を呼びかけたところ一七二人から申し込みがあった。かくして建築も順調に進み、大正三（一九一四）年二月一日に竣工、同月一日に移転を開始した。これが駒沢における第一期工事で、やがて園舎の外に礼拝堂、園児室棟、遊戯室棟が加わった。田園地帯のただなかに、周囲から目立つようにして一群の建て物が完成したのである。

田舎は一望眼を遮るものなき武蔵野の中原に立てる事なれば、空气清新、眺望絶佳にして洵に理想的の育児場たり。併かも玉

川電車駒沢登記所前停留所より一町弱にして分園の正門に達するを得るが故、交通の便宜亦絶好なり。<sup>(7)</sup>

後のことに触れると、第二期工事では大正七（一九一八）年十一月、男子室、事務室、応接室、役員室、集会室を加えた。北川自身の「思うところ」を次に引用してみる。

これまで園主は主として青山本園の方に居て園務をみて居りましたが、今度駒沢分園に引移ることとなりました。青山の本園は余程久しい前から単に事務所といふ事にして、中学程度以上の園児が居って通学の傍ら園の事務を執り、園児の多数即ち小学校通学の児童以下幼児の全部は駒沢の分園で育って居ました。園経営の上から見ますと園主は青山に居って園務を執らねばなりません、又園児教養の点から考へる時は、園主は何しても駒沢分園に常住して、子供の撫育と指導に任じなければなりません。園の経営、言葉を換へて言へば園を維持して行く方法を講ずる事の大切なのは言ふまでもありません。園児の教養も決して等閑に附する訳には参りません。諸物価が異常の騰貴をしたので園の経営は随分困難であります。昨今多少の下落の傾向はあると申しながら、まだまだ四五年前の様に廉くなつては居りません。従つて園の経営は依然として此先も困難と見ねばなりません。併しいくら園維持が困難だといつても園主が何時も事務のみに没頭して居つては、本園事業の真生命とも申すべき子供の教養上に缺る所が生じはしないか、園主の憂ふる所は全く之れに外なりません。勿論今日までと雖も園主が駒沢分園を全然放鄭したといふのではない、又多くの幼児を全く顧みなかつたといふのではありません。唯主として青山の本園に起居して時々分園を見舞ふといふ状態にありました。之れではどうしても遺憾の点があるといふので、今後は駒沢分園に引移つて多くの幼児と起居を共にし、主として園児の教養に意を用ゐるといふこととなりました。<sup>(8)</sup>

同じ時期、東京府は地域救済を目的とする方面委員制度を発足させ、世田谷、松沢、玉川、千葉、砧、駒沢の六方面に区分、八六人を方面委員として委嘱任命した。そのうち駒沢には一四人配置、松島はその一人となつた



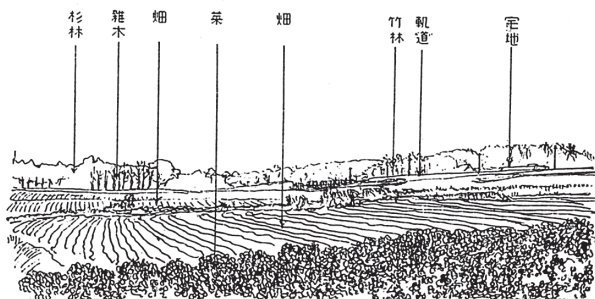
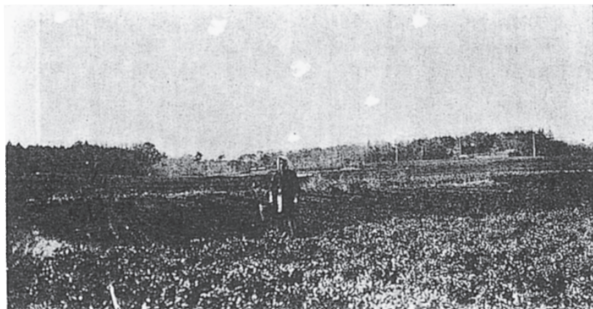
（府令、第三三三号）。この時、松島は最も若い方面委員ということで注目された。

蔬菜栽培地帯たりし荏原郡中、其中央に位し、且平素統計の調査に精確の稱ある駒澤村の農産物の作付反別を示し、其一斑を窺はんとす。抑々駒澤村は、第二帯に位し、日本橋より直經三里内外の距離に位し、蔬菜栽培地帯の中樞たり。其中央を貫通する厚木街道は、隣接町村中最も發展せる澁谷町を過ぎて赤坂區青山に通じ、畑作物に要する肥料の如き、今や一里弱の澁谷町の供給によりて豊に、隣村世田ヶ谷村に亘り設置せられたる諸兵營の肥料も、亦其蔬菜栽培に多大の便益を與ふ。

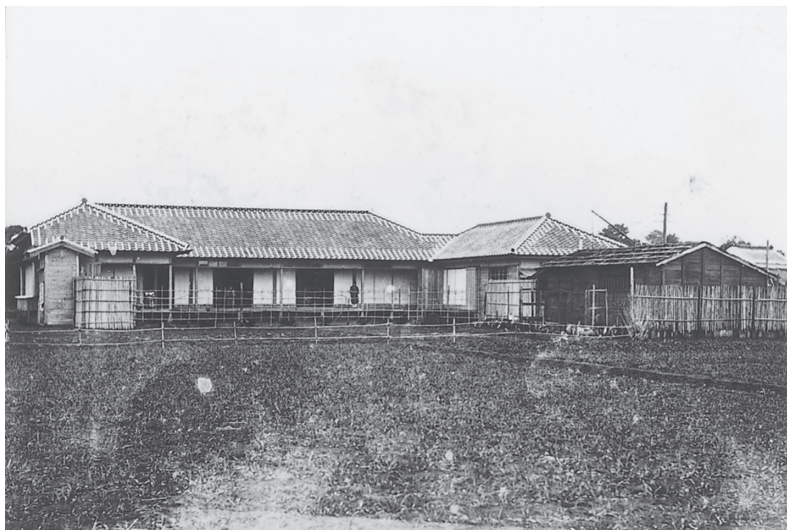
明治四三（一九一〇）年一月四日、東京育成園にひとつの団体が生まれた。その名を同竈会という。この一風変わった名の由来を座間勝平が説明している。

同竈会とは本園の同じ竈にて炊かれたる、お粥を啜れる人々の親睦を計る為めに設けられたるものなり。同会規則を案ずるに、会員たるの資格の条項に曰く、育成園の朝のお粥を啜れる者に限ると。思へば育成園のお粥を啜れる人々も、今にては少なからず、園出身の兄弟姉妹は勿論の事として、尚園主の情に浴して立身出世せる者、及び園主を助け、園児等と兄弟姉妹の誼みを通じたる事ある人々も、亦正しくお粥を啜れる者といふべし。<sup>10</sup>

座間は『回顧二十年』でも、「親睦を保つために設けられたる一つの陸會なり」（三三三頁）と述べ、卒園した者、外部にあつて支援を惜しまない者たちが一体となり、北川に対する敬慕の想いを表明、祝意を示すため、年に一度集まることとしたものである。正月四日になると各地から賀詞の意味も含め、彼らは育成園に集まった。もつとも、「園主が子供を懐ふ心から生まれた」<sup>11</sup>会であるから、はじまりは北川の意思にもとづいて成立したのであ



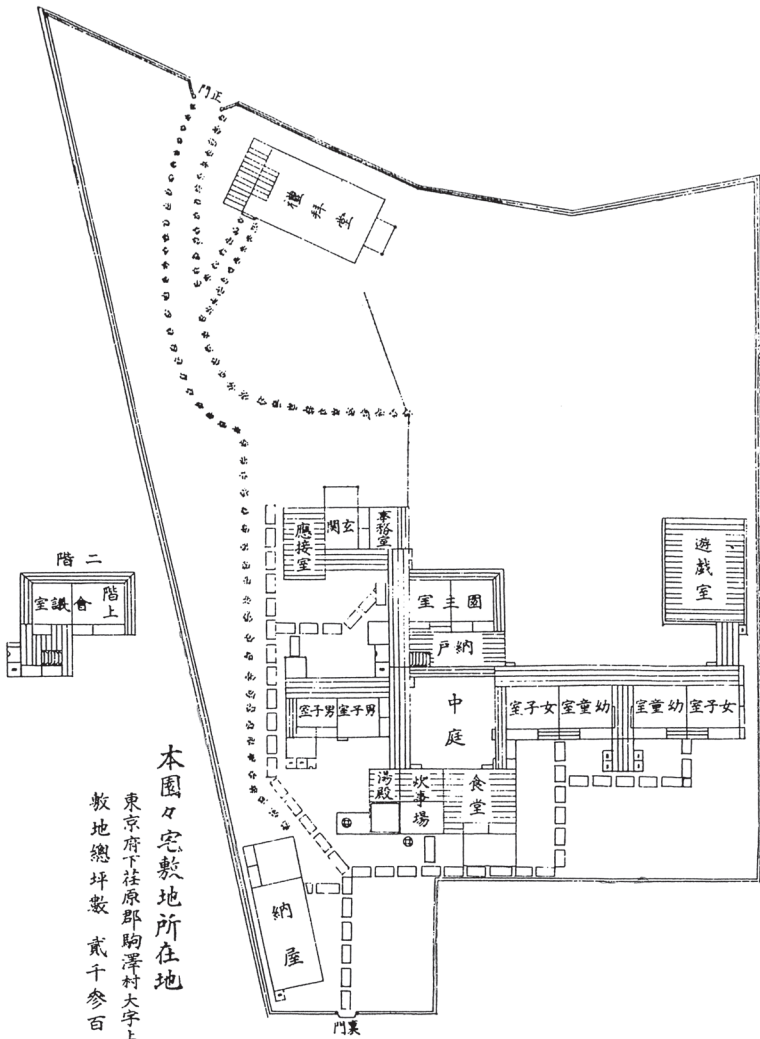
世田谷区駒沢，松沢村付近の昭和初期の風景  
※小田内通敏『帝都と近郊』，有峰書店，昭和49年10月。



落成当初の駒沢分園舎（上：表側 下：裏側）

第一期工事で整備された園舎

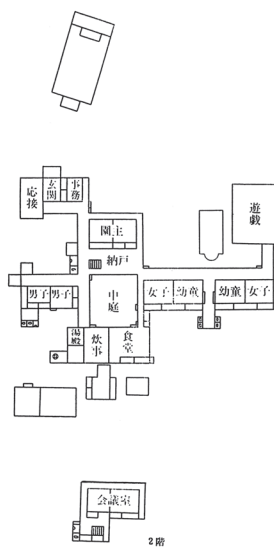
回想の松島正儀 (一)



本園々宅敷地所在地  
東京府下往原郡駒澤村大字上馬引澤真中  
敷地總坪數 貳千參百九拾坪

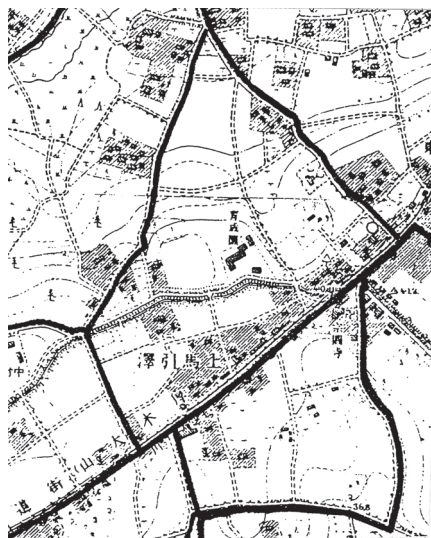
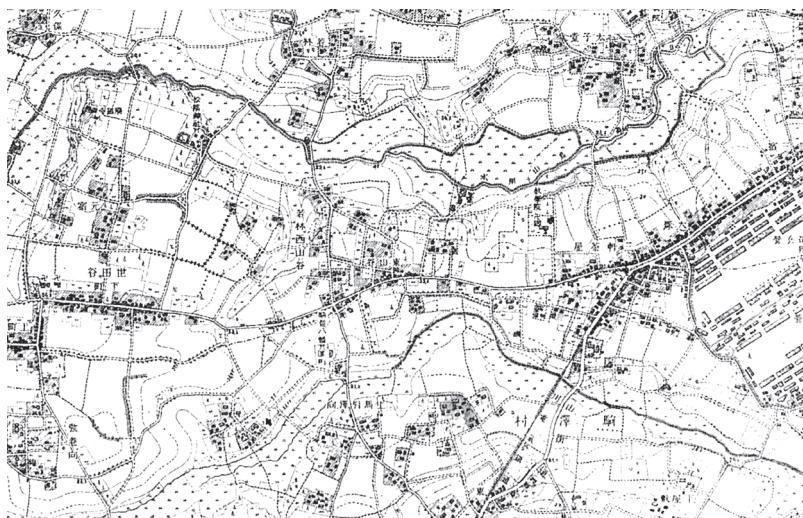


東京育成園駒沢分園（第二期工事の後）





駒沢村付近 (中央に育成園がある)



※明治42年，国土地理院作成。



「母おもふ会」昭和7年5月の総会

るが、やがてその「想い」は逆に卒園生が会を主導するようになり、その名も「母おもふ会」と改称した。大正一三（一九二四）年二月のことである。集まる日も正月四日から北川の誕生日に近い二月五日に代え、総会、屋外競技会、屋内演芸会、会食会と多彩なプログラムを丸一日使って催した。育成園にとっては年間最大のイベントである。「母おもふ会」の会長には座間勝平が就き、「本会ハ東京育成園出身者及同園ニ特別ノ縁故アル者ヲ以テ組織ス」（会則、第二条）、「本会ハ東京育成園創立者タル北川園母ヲ敬慕シ兼テ会員相互ノ親睦ヲ図ルヲ目的トス」（第三条）とあり、毎年六〇名内外の参加があり、「昼食後運動競技、唱歌、童話劇、福引など参会者一同は心から語り合い、母上ともどもかぎりなき愉快の中に会を閉じました<sup>12)</sup>」。これとは別に、誕生祝いの会を毎年園内関係者だけで行ったが、松島は一二歳の時の様子を作文に残している。



「母おもふ会」の戸外競技



大葬場殿幄舎を用いて設けた応接間<sup>(15)</sup>

一月の二十三日はお母さんの第六十回の誕生日であった。赤の御飯にお魚でご馳走をいただいて、お菓子やおもちやお小遣いなどたくさんいただいた。そして僕達は二十八日の日曜に駒沢で祝賀会をしてお母さんの萬歳をお祝ひした。対話、合唱、暗誦、小劇など皆んなよくできて、ずいぶん賑やかであった。<sup>(15)</sup>

待ちに待った母上の誕生祝賀會と母おもふ會第二回の日となった、天われわれを恵みてか二、三日曇り勝ちな天気も、けふは時折暖かい光がさしてわたし達を元氣づける、それでも寒い風が顔を撫でる、寒さをよそに小さな子供たちは黄色に枯れた芝生の上を跳ねまわっている。間もなくプログラム通りに運動競技が始められた、長い廊下には座布団が敷かれて見物席になっていた、少年組対少女組の綱引は元氣よく綱も切れさうだった、幼年組の駄足競走では小さいもみちのやうな赤い手を振って廣い芝生を一廻りして、勝っても敗けても一様に母上からごほうびを頂いて嬉しさう。スプーンレースも濟んで源平投げの合戦となる、總勢五十餘名、夢中になって毬を投げる、にぎにぎさを通り越してかけ聲なんかは物凄い、一通り競技が終ってから一同著席して式を擧げた、幹事の一人が開會の辭を述べる、會長や會員の祝辭があつて母上が挨拶された。式が終れば引續き在園中の兄弟姉妹主催の餘興の幕があいた、童謡や童話劇もあつた、青年學生組出演の狂言もあつた。狂言番附は

「阿波の鳴戸」一幕、「くづの葉」一幕、「戀愛の平等」一幕、役者はいづれも母上手製の鬘をつけて随分観客を笑はせた。この日の來會者には神戸や房州から態々來られた方もあり、なかなかの盛會であつた。ご馳走は餘りないのが原則となつてゐるさうですが母上が喜びの餘り、おでん、甘酒、ごもくめし、たまご丼といったやうに規則違反のご馳走が山のやうに出てゐました。みんなで遠慮なしに頂戴いたしました。最後に母上の心づくしの空くちなしの福引きを引きあてて五時半頃に散會した。<sup>(14)</sup>

## 註

- (1) 育成園ではこれとは別に、「当代の名家より揮毫寄附せられたるものに付、御買求を乞ふ」という宣伝文句で「和洋絵画各種」の販売を行い、収入源のひとつとした。ここには文人、画家がよく出入りし、著名人との交流も多かったからである。代金はおおよそ一点五〇銭から二〇円位まで、目録等も配布して注文をとつた。
- (2) 『東京育成園月報』、大正三年八月、二頁。
- (3) 『新修世田谷区史』、下巻、東京都世田谷区、昭和三七年一〇月、二八四頁を参照。
- (4) 『東京育成園月報』、第二二三号、大正七年七月、二頁。
- (5) 北川波津「育成園は本部を駒沢分園に移転しました」、『東京育成園園報』、第二三四号、大正一四年五月、二頁。
- (6) 「駒沢の朝」、『東京育成園園報』、第二二五号、大正一五年九月、一二頁。
- (7) 座間勝平編「回顧二十年」、東京育成園、大正八年五月、二九頁。
- (8) 『東京育成園月報』、第二二九号、大正一〇年七月、一頁。
- (9) 大正中期の駒沢村付近（小田内通敏『帝都と近郊』、有峰書店、昭和四九年一〇月、一五五頁。）
- (10) 座間北郎編『育成園小史』、東京育成園、明治四四年五月、三五頁。
- (11) 『東京育成園園報』、第二二三号、大正一三年四月、四頁。
- (12) 『東京育成園園報』、第二二六号、昭和二年八月、八頁。



- (13) 『東京育成園月報』、大正六年三月、三頁。
- (14) 『東京育成園園報』、第二二四号、大正一四年五月、四頁。
- (15) 大正二（一九一三）年三月、明治天皇大葬の際に建設、使用した幄舎の一部が育成園に下賜、続く大正三年六月、昭憲皇太后の大葬に際して使用した幄舎の一部も下賜された。これらは漸次園内に移築して、施設の一部として使った。又、用材の一部を礼拝堂の建築用に転じ、ために北川は礼拝堂入口上部に菊の紋章を飾った。

### 三 東京育成園に引きとられて

北川の事業を支えたのは、身辺にいた従事者や理解者、支援者ばかりではなかった。成立事情から分かるように、当初はハリストス正教が最大の支援者であった。やがて支援、同情の輪は外に拡がり、徳富蘇峰のようなジャーナリストが新聞、雑誌に記事を書き載せるなどして、一般からの同情者も増え、社会主義者の一部も宣伝に役を買った。こうした事情に加えて明治三四（一九〇二）年一月、井口展子、笠井梅子、吉井臺子、藤田君子、安藤作子、三田小松子等、上流社会に属する著名人が賛助募集の発起人となり、施設運営の基礎となる財政基盤を強化するため、活動を開始した。明治三二年末の賛助員は二〇数名であったが、二年後の三四年末には二六四名に増え、この傾向は更に拡大した。ロシアをはじめ、海外からの賛助、寄付者を入れると数年後には二、〇〇〇名を越え、これらが東京孤児院を支え、財政基盤を構成した。宮中の『女鑑』に紹介されたこともあり、皇室にその名が知られ、やがて明治三四（一九〇二）年一〇月、東京府から未成年の孤児後見人に指定（東京府令、

第四一號)され、社会的認知度を高めた。<sup>(1)</sup> 一方では自助努力も重ね、明治三十三年一月幻燈部を設け、慈善画を乾板に焼き、それを持参し各地を巡回した。講演、幻燈会を通して賛助員の募集を行ったのである。時には年長児を連れていくこともあり、明治三十三年の例でいえば「駿河、三河、尾張各地」<sup>(2)</sup>を歩いた。

吾院が院児教育上止むを得ざる事情ありて、其家外労働を廃止致候より、常に世の同情を博するにも関わらず、経済上著しく困難を加へ候事は、本誌の毎に訴る處の如き次第に有之候、而も世上救済を要する者益々多く、隨て院の前途は益々多望にして、世の同情を仰がざるを得ざる事いよいよ急切に感じ候、就ては今回汎ねく院の事業を紹介し、大に世の同情を仰ぐの目的を以て、院内に幻燈部を設置致候間、切に諸君が賛助を祈上候。<sup>(3)</sup>

東京孤児院賛助員募集の趣意書は広く配布され、明治三五年末には收容児童二五名に対し、賛助員の数は九〇八名となった。同年四月一九、二〇日にはこれら賛助員を招待して親睦祝賀会を開催している。この時、子供たちには「親類が来る」と教えて歓迎の催しをした。この時の印象は北川の心に深い感動を与えたようで、後に院史にとって記念すべき、忘れられない一日であったと記している。<sup>(4)</sup> かくして賛助員募集の成果が上がり、施設、設備の充実が財政面から可能となった。こうした動きを瀧村竹男は、「東京孤児院の新築工事成るを告げ、茲に落成の式を挙げらる。院主北川氏の此の金ありしより僅に一年にして、其成功を見るを得たるは寔に稀有の事に属す。院主の満足想ふべし。これ蓋し大方慈善家の賛助によりしは勿論なるも、もと院主の熱誠より社会を感動せしめたるに依らずんばならず」<sup>(5)</sup>とまとめた。明治四三(一九一〇)年二月、財団法人の認可を得て、北川は法人理事となった。そしてこの年以後、内務省の助成金が毎年下付されるようになり、多い年で六五〇円、少

ない年でも二五〇円の増収となった。このことは経済上の利点ばかりでなく、施設の存在が世間に広く知られる契機となった。催し物を通して収入源を確保するため、各地でイベントを開催した。第一回は東京、神田錦輝館で慈善音楽会と書画展覧会、ついで京都で慈善演劇会を催し、京都帝大関係者が支援した。さらに大阪で慈善音楽会を催し、この時は大阪毎日新聞が後援した。収益面では明治三十八年二月二三日、青山学院で慈善音楽会を催した時の純益は一二八円一五銭、同年五月二日から五日間公演した、帝国劇場の慈善演劇会では純益一、四七九円四三銭を得ている。こうした活動が順調に進み、賛助員が増加したことにより、借地の購入、増改築もより、自由に行なわれるようになった。ちなみに、賛助員は毎月一〇銭以上寄付することになっている。その数は多い時で三、〇〇〇人以上もいたというのだから驚く。

北川が孤児院経営で目指したのは、施設経営そのものでなく、まして専門的な教育、療育機関を目指したのではない。単純に、そしてひたすら子供たちの親であろうと願う、それだけである。このことは日常生活に反映し、具体的には家訓によって周知された。北川自身の語るところによれば、「私は只親の役目を果たすために努力して居るばかり」<sup>(6)</sup>で、それ以上の意図は持たない。

孤児院を建立致さうと申すのではなく、慈善事業を経営せうと申すのでありませぬ、只憐れな小供を眞実自分の小供として、育てて見やうといふに過ぎませぬので、洵に同情諸家の大なる好意に対しまして、慚愧の至りに堪えませぬ。<sup>(7)</sup>

従って、石井十次が岡山孤児院で、あるいは留岡幸助が巣鴨家庭学校で実践した家族主義経営とは似て非なる関係にある。とはいえ、処遇には一定の形式や方針が必要なこと、また経験を踏まえてそれを絶えず改善、工夫

していく姿勢保持に努めた結果、「老婦人にして其勤勉能く児女の鞠育に努めつつあり」という周囲の評価も妥当と考えられる。

私は是迄の経験上から見ましても一つの家庭に百人、二百人と可憐なる孤貧児を收容致しますことは教育上より見ましても、又温き愛情を彼等に与ふる上から見ましても、絶対に不得策ではあるまいかと存ずるので御座います。其れで私の考えますには、否私の実行致したいと存じますのは一つの家庭に沢山の子供を收容致しますよりは寧ろ各地に二、三十人乃至七、八十人位も收容致すに足る丈の救済所を設けましたならば、子供の教育は勿論、愛情の点に於て充分に完全なるものが出来る。

財団法人化し、寄付行為に目的を掲げるとき、これまでの事業を顧みて「本園ハ基督教ニ抛り收容ノ児童ヲ家族主義ヲ以テ薰育シ、忠実勤勉ナル国民タラシム」(第三条)とし、家憲、家訓を日常の実践の抛り所、規範と位置づけた。家憲の第一をみると、「互ニ相愛シテ俱ニ楽シムコトヲ心懸クベシ」とあり、家族的情愛の細やかなることを求めた。近くで処遇を見た大賀一郎によれば、北川は「いつも貧しい私をいたわって下さって、お菓子やご馳走を下さいました。そして、元気な女丈夫のこのお母さんの話をよくお聞きしたものです。このお母さんのお話をつづめていえば『真実第一』ということでした。第二に『恥を知れ』という事でした。そして、第三に『借金をしてはならない』ということでした。<sup>10)</sup>「家訓」は幼少児童にもよく分かる様に、自営、行為、禁欲というテーマを具体的に「□□スベシ」、「□□スベカラズ」、「□□ナルベシ」、「□□ナカレ」と指示を与えている。

回想の松島正儀（一）

院の家憲

- 第一 互ニ相愛シテ俱ニ樂シムコトヲ心懸クベシ
- 第二 自己ニ對シテモ他者ニ對シテモ又其ノ執ル所ノ職業ニ對シテモ常ニ誠實親切ヲ第一トスベシ
- 第三 眞ノ善惡ハ神ヨリ外ニ知ルモノナシト心得妄リニ他人ヲ議スベカラズ
- 第四 禽獸ニ對シテモ道德ノアルコトヲ忘ルベカラズ
- 第五 自己ヲ尊重スベシ
- 第六 働キ得ザルニアラズシテ働カザルモノハ世ニ生存スベキ權利ナキモノト心得ベシ
- 第七 常ニ内外ヲ清潔ニスベシ
- 第八 節儉ハ人生ノ美德ナリト心得ベシ
- 第九 向上ハ人生ノ義務ナリト心得ベシ
- 第十 常に神ヲ喜バセ奉ルコトヲ心懸クベシ

こうした規則をベースとして日常生活が展開されたわけであるが、月報に掲載された「院内二十四時」という、一日の生活風景を次に紹介してみたい。

時計は午前五時を報じ、今は一同が起床の時となりぬ、院母は先づ起出で邊りの戸を開き、院児等と呼起さんとして其寢室に入れば、或者は或者の頭に足を乗せ、或者は蚊帳の外に轉げ出で、一人だに行儀正しく臥したるはなし。時しも幼児熊市は、長兒のために其腹部を枕にせられ、苦しみに堪へ得ずして泣出せり。院母は驚きながら、急ぎ之を救ひ出し、更に他の者と呼起したるも、幼兒の一二を除きては、中々容易に起き來る者なく、偶々起きんとする者あるも院母の影の見へざる時は、又元の如く眠りて恰も死せるが如し。院母も流石に此有様には困り果て、更に手づから夜具を取除き、一人々々抱き起せば、左しも石の如くなりし院児等も、澁々起出だせり。夫れより女兒は院母に従ひ、炊事の役に當り、其他の者は此日の當番に據り、或は表に或は





ベースボールを楽しむ



礼儀作法を学ぶ

裏に或は内に、各々持場々々に就て掃除の任に當り、六時に至れば皆任務を畢へて顔を洗ひ、一同打揃ひ朝の祈禱の座につけり。長なるは十七才、幼なるは六才、院母之が先きに「天に在す我等の父よ……」と可憐なる音聲にて、一齊に唱へ出す時は、何となく一種の寒さを覺へぬ。祈禱終れば長幼共に「お早う」の禮を換はし、直ちに打揃うて朝餉に就きぬ。膳に在る物は、只之れ南米の粥に鹽のみ、嗚呼實に之れ院が涙の紀念にてあるなり。回顧すれば明治三十年の冬、院の困窮正に其極に達し、喰ふに食なく、着るに衣なく、夜中燈を點さざる事數日にして止まず、當時養ひ居たる孤兒は、二十七名なりしが、内三名は實に當才の嬰兒にして、起臥より大小便に至るまで、一に之れ院母の手に藉らざるを得ざりし次第なるが、是等多数の幼兒が、顔色憔悴して力なげに目をしばたきつつ、一時に飢を訴へたる時の如き、實に云ふに忍びざるものありき。斯くて窮乏はいよいよ迫り、如何とも爲す能はず、終に全院一同一室に集まり、静かに餓死を待つに至り、偶々正教新報主筆にして、今の院評議員なる石川喜三郎氏の來訪せらるるあり、氏痛く此慘況に同情を表せられ、即座に其財産を打拂ひ與へられたるが、是を以て僅に數分の南米を買ひ來り、之れを粥となし、漸くに全院三十一名が一時の餓死を免かれ得たり。其後幸に大方慈善家の義助を恭ふし、三十余名の大家庭は一日米一升到麥一升を以て、露命を繋ぐ事月餘に及び、一面には石川氏が、熱切なる文筆を以て、正教新報紙上に院の慘狀を訴へられ他の一面には兒玉菊子姉等が義金を募集せられたりしかば、其結果忽ちにして、三百圓の喜捨を得今日に至るを得ぬ。院が朝餉の南米の粥に鹽なるは、此當時を忘れんが爲め常に斯く行はれつつあるなり。朝餉終りて、尚ほ登校には三十分の餘裕あればとて、女兒のみ後片付けに残りて、他の者は庭園に出で行けり。暫く經ちて女兒も又他の者の後を追うて出で行きぬ。庭園には彼方此方に定められたる彼等の所領地ありて、日頃小さき手に丹精して、育てたる草花の美しく咲き揃へるあり。彼等は其所彼所に集まりて、其美を賞しつつあるなり。實に彼等にも亦た優しき、美を愛する心は存せり。吾れは彼等が此振舞に、少からず感じ入り、其後に従ひて出で行けば、或者の所領地に朝顔の持切りにて、今花の盛りなり。或者の所領地は小さき畑をなし、種々の草木を植付け、各々札を立て、自分勝手の名を記るし、周圍には五寸位の高さに垣を結び、大日本植物園など記るされたり、或者の所領地は、先頃彼れが少年の友にて見たりし、松島を形づくり、池の如きものを掘りて其中に小嶋を數多築き、松の代りに日照草を植たり。其他山あり川あり平野ありて、孰れも多少の草木は植へられ、唯憾むらくは、是等の草木も月に二三回は植替へられ、爲めに往々枯死する事あり。從て其風景も變化する事多く、昨日山なりしものも今日は川となり、今日の川は明日の山となる事あるなり。やがて登校の時は來れり。院母の注意に依つて各々支度にかかりぬ。一兒は院母

明治二十一年～二十九年「東京育成園」より

年次	男		女		計
	男	女	男	女	
明治三十二年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十三年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十四年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十五年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十六年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十七年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十八年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
明治三十九年十二月三十一日現在	二	二	二	二	二二
七年未滿	二	二	二	二	二二
七年以上十年未滿	二	二	二	二	二二
十年以上十五年未滿	二	二	二	二	二二
十五年以上二十年未滿	二	二	二	二	二二
二十年以上	二	二	二	二	二二
計	二	二	二	二	二二

年次	入園者		出園者		死亡者		年末現在
	男	女	男	女	男	女	
明治三十二年	八	一	—	—	—	—	九
明治三十三年	四	二	—	—	—	—	六
明治三十四年	一	—	—	—	—	—	—
明治三十五年	三	—	—	—	—	—	三
明治三十六年	—	—	—	—	—	—	—
明治三十七年	—	—	—	—	—	—	—
明治三十八年	—	—	—	—	—	—	—
明治三十九年	—	—	—	—	—	—	—
合計	五八	二二	—	—	—	—	五

の前に下駄の緒の切れたるを訴へたり、二兒は筆墨を請求したり、かくして一同打揃ひ、行て参りますの言葉とともに出て行けり。院内は再び静まりぬ。後には最年長の兒女と熊市文女の二幼兒のみ残り。年長の女兒は新來の保母に従つて、裁縫の稽古に就き熊市と文女は打連れて草花摘みに出て行けり。やがて二幼兒は數多の草を持ち來りて、いと睦じくまま事を初めぬ。今朝漸く片付けられたる板間も、忽ちに草葉もて散らされたり。暫く經ちて二兒は何事か云ひ争ひしが二人は俄かに泣き出しぬ。吾れは慰めやらんとしたるに又二人は笑ひ合へり。實に小兒は罪なき者よと思ふ内、又二人は取亂したる草花を其儘にして、共に手をとりて面白き歌をうたひ、何所にか出で行きたり。おもへば罪なきものは小兒なるかな。

松島正儀が生まれたのは明治三七(一九〇四)年八月一日、出生届を出したところは東京市京橋区、この年は東京孤兒院が赤坂区青山南町六丁目一〇五番地に新築、移転した年にあつており、松島が生まれて二カ月後の一月である。出生には複雑ないきさつがあり、実父は板井文治、実母は松島やいという。生まれたのは石川県金沢市上今町三二番地で、両親とも富山県魚津の出身、実父の家業

は旅館業であった。二人の結婚は双方の家族、親戚が不承知、加えてやいは既に妊娠、故郷魚津にはとどまることのできない身を抱えていた。やむなく「不義の児を腹にやどして故郷をのがれ」金沢市内で出産、その後は知人をたよって上京した。知人の名は黒田源太郎といい、司法界に身を置き、市内本郷に住んだ。後に神奈川監獄、小田原分監長を勤め、少年教誨事業には一言を持つ人物で、著書に『教育の欠陥が生みたる犯罪少年の告白と個性調査』（広文堂、大正八年一月）、『炉辺夜話』（非売品、昭和八年一〇月）がある。乳児の正儀を抱え、黒田家の家事手伝いをしながら、その日暮しを重ねた。後年、松島の語るところによると、「私の母親の結婚について当時、富山県のこの地方では恋愛を受け入れなかったたので、両方の実家、親族が結婚を認めなかったわけです。両方とも籍を入れることに判を押さなかった」という<sup>12</sup>。この家でやいは、黒田の友人、横山源之助と出会う。横山も同じ富山県魚津の出身で、漁師の網元とそこに住む女中奉公人の間に生まれた庶子という経歴を持つていた。彼も若い頃、故郷には居づらく青雲の志を抱いて上京、やがて新聞記者となり、その名が知られるようになって。横山と知り合ったやいは、やがて黒田の家を出て本郷西片町一〇番地に間借りし、二人は同棲生活に入る。横山は正式に結婚するつもりで魚津の松島家を訪れ、「東京に来てはいるけれども、私が責任を持つから一緒にになりたいと言ったら、おまえさんが新たに受けかわっても認められない、こういうことで、ついに認められなかった」<sup>13</sup>。従って、入籍せずその生涯を終えた。横山と暮すようになって、やいのもとには新聞記者や文士が出入りするようになった。そうした文士のなかに、後の正儀と深く関わる人物が二人いた。東京育成園に引きとられる筋道を整えた彼らは、北川の経営する孤児院の理解者であり、かつ支援者であった。正儀によれば「当時、東京育成園には文士や絵筆に親しむような方がかなり出入りしていたような関係で、小林さんと滝村さんという文士

の方がその縁故で私を北川先生に頼んだらしい<sup>14</sup>という。小林一郎は後に日本大学文学部教授、同学部長になっている。滝村斐男は長く育成園の評議員を勤め、『東京育成園月報』では「この園のために何等の盡した所もなく、さりとして又慈善事業、孤児院事業などに関して何等の経験と研究とを有するでもない不肖の如き者<sup>15</sup>」と自己紹介するが、熱心な支援者であったことに間違いはない。彼も後に、東京高等師範学校教授を経て、大阪府立女子専門学校長となり、昭和二（一九二七）年十二月、五〇歳で逝くなった。他に白柳秀湖も関ったといわれるが、詳細はわからない。やいと横山の間には梢、博太郎の二児が生まれた。明治四一（一九〇八）年に梢が、四五年に博太郎が生まれ、梢が生まれた時、ちょうど五歳になろうとしていた正儀は、横山、やいの意向と周囲の勧めで外に出されることが決まり、小林の一時預りを経て、東京育成園に引き取られた。それまで正儀、梢を含む一家四人が暮したのは小石川指ヶ谷町三〇番地で、伝通院と市電通りにはさまれた坂道の中途にある間借り屋である。横山も、故郷魚津から上京した養父母をはじめ、弟妹等家族を扶養しなければならぬ立場があり、生活は苦しかった。だから正儀を手離すことに、梢の出生だけを理由とするには無理があり、立花雄一が「一女梢がうまれている。やいがさきにうみおとした子（正儀、引用者）を、やむなく養育院（東京育成園のまちがい）へおくつた<sup>16</sup>」のは、「この間の事情による」という解釈、つまり妹の出生だけを理由とするには無理がある。結局、明治四一年二月五日、日本橋区北島町二丁目一九番地の小林宅を出て、東京育成園に収容された。念のため付言すると、当時の『東京育成園月報』の「新収容児」「新入所児」欄に松島の名はなく、代りに入所理由は詳しく報知されており、その箇所を引用してみよう。



右は昨年一二月五日收容せうるものなり、同児は此の世に生まるるや間も無く両親に訣れて所謂孤児の悲境なる運命に陥りしが情がある人に救はれて今日迄無事に生育し来りしも、其の人とても今後同児を完全に養育し能はざれば宮坂錦吉、横山源之助の両氏此の状態を可憐に思はれ、本園委員小林一郎氏を介して同児の救養方を願ひ出でられたり、園にても事情気の毒のものと思ひ、茲に同児を收容するに至れるなり。<sup>(17)</sup>

單純に孤児、棄児として收容された場合とは事情が異り、後年、「東京育成園の子どもたちと出会ったのです。ここでの三〇名ほどの子どもたちとのふれあいがなければ、私の人生は違ったものになったでしょう<sup>(18)</sup>」と語ったのはこの間の理由による。赤坂区青山南町六丁目一〇五番地にあつた育成園の隣りに徳富蘇峰が住んだことは既に触れたが、蘇峰は育成園に関心を持ち、やがて支援者の一人となつた。毎朝、「ステッキを持つて孤児院の前を散歩するんですね。そういう関係で寄られて、言葉を交わした<sup>(19)</sup>」。横山は大正四（一九一五）年六月三日、四五歳の若さで逝くなつた。いささか脇道にそれるが、横山源之助の最晩年に触れてみたい。立花は、「腺病質型であつた横山の晩年はむなしく暗く、肋膜炎が持病でなかつたかと思われまます。長く病軀の人であつたらしい<sup>(20)</sup>」という。では、その期間はどれ位で、途次健康を取り戻したことはなかつたのか。まず、病軀を横たえた「鵠沼の客舎」は、横山の愛人で梅花女学塾の講師を勤めたことのある尾崎恒子宅ではなかつたか。新潮社社員で友人の中村武羅夫は『明治大正の文学史』のなかで、「間借りの二階の六畳で、結核に肺炎を併発して、真黒な顔色になつて死ぬ時にゼエゼエと息を喘がせながら、聞きとりにくい唖れた声で言つた最後の言葉は、『中村君……これが、人生といふものかねエ……』と、いふことだつた」（二六五頁）。遺された家族について、黒田は「大正四年二月下旬より君が病勢は益々悪化し、前途有為の我が横山源之助君は、哀れ再起の望も絶えたるものと自ら知るや、

一子梢嬢の前途を、友人尾崎（恒子）氏に託し、独り静かに白玉樓中の人となった<sup>(21)</sup>」のは同年六月三日のこと。この後、梢は尾崎によって育てられ、博太郎は三年後の大正七（一九一八）年一月二六日、五歳になった時東京育成園に収容された。しかし、その数年後に病没している。<sup>(22)</sup>一方、やいは晩年の横山がブラジル渡航や地方取材でしばしば家を空けたため、本郷区千駄木林町に住むジャーナリスト、松原岩五郎を頼るが、横山の没後は湯島天神町の学生寮、育英舎に住み込みで雇われ、数年後ひっそりと逝くなった。正儀は多分、母の死に目には立ち会っていない。やいという女性は「美人で、ひとのいい女であった」という。後年その遺骨は豊島護国寺から、神奈川県鶴沼の本心寺に改葬され、現在に至っている。

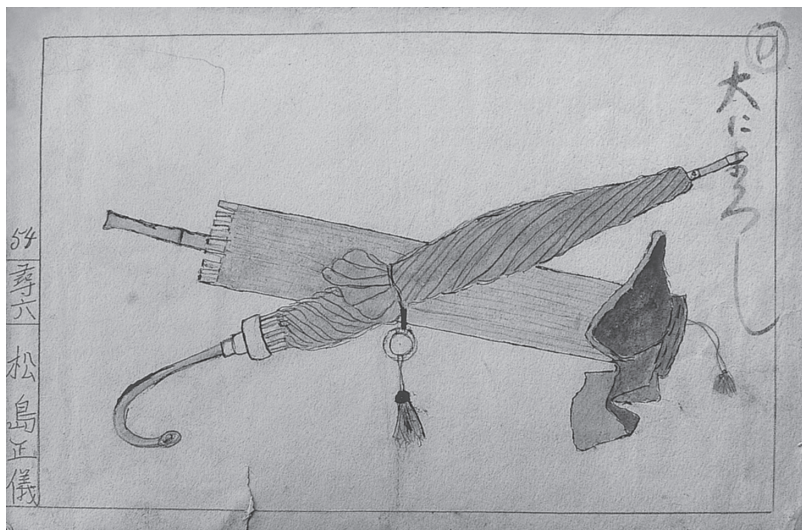
手紙拝見、つきぬ涙を少なき文に托し、今は亡き西原の霊を慰めたい。愛妹梢の心とともに。汝の心の動きはよくわかる。果てしない魂の嘆きは愚なる兄なるも、鋭く感ずる事が能きる。去れ共、最後の生命は大自然の中に最大の力として働く神の御手なるを信じ、一歩後るる事となった汝及その兄として、西原を天国の園に祈りを持って送ってやらねばならぬ。少しばかりだが五圓札一枚同封した。汝が香典を贈るなら、それと合わせて彼の霊前に捧げて呉れ。絶対に姓名を出さぬ事、目下それが不都合なら汝の想ふ様に、都合よき様、都合よろしき方法を以て汝の心と共に頼む。残る願ひは汝の身心である。何卒呉々お大切を祈る。

これは昭和八（一九三三）年三月六日付「梢様」宛、「兄より」と記した書簡の草稿（東京育成園所蔵）である。文中の「西原」が誰で、二人とどの様な関係にあったかは不明だが、かなり身近かな係累らしいことは想像できる。あるいは梢と特別な関係にあって、しかも若くして逝くなった人物、それを松島も知っていたが、公に交流のあった人物ではないといったことも想像される。いずれにしても松島は唯一の肉親であり、当時二六歳の異父

妹とは、戦前の昭和八年という時点で互いに連絡を取り合うつながりを持っていたことは確かだと言わなければならない。

同じく東京育成園が所蔵する書簡草稿ノートを括っていくと、前年の昭和七（一九三二）年七月一六日付「尾崎恒子、梢さんに」宛、「美枝子」発書簡の下書きが出てくる。こちらは文章が断片的なので、全体の趣旨は分りにくい。「先日は富士五湖めぐりにおでかけしましたよし」、「梢さまも御一緒におともなされたよし」、「私共まで嬉しく思っていました」、「何卒御身も御心もおいとひあそばして強き一日一日をあさごとにおむかえあそばすやう、かげながら祈り上げてをりました」という文章が読みとれる。つまり、若き松島夫妻と尾崎恒子、梢は互いに相手の消息を知り、文通をとおして情報を共有していた。しかし、松島の側から公にして、積極的な交流を続けたようには見えないから、かなりプライベートで、限定的なものであったと考えて良いのではあるまいか。

前述したように明治四三（一九一〇）年二月二三日、財団法人の認可を受け、翌四四年一〇月、荏原郡駒沢村上馬引沢字真中七五四番地に二三九〇坪の土地を購入、徐々に移転をはじめた。大正二年には明治天皇大葬場殿舎の下賜を受け、駒沢に移築したことも既に触れたが、それが完成したのは翌三年一二月のこと。転校の手続きをとった児童から、順次駒沢小学校深沢分教場に移った。松島の青南小学校尋常一年に入学したのは明治四四年四月一日で、同時に入学した園児に大賀潔、林市太郎、星野兼吉がいた。とくに大賀潔は終生の友となる人物で、その正式収容期間は四三年四月から四四年八月までと比較的短期間であった。しかし退園後も北川の薫陶を受け、やがて長兄一郎とともに育成園の有力な支援者となった。大賀一郎は「ハス博士」の異名で戦後世に



正儀 (12歳) の作品 (水彩画)

広く知られるようになったが、松島との関係については後述する。小学校時代の姿は『東京育成園月報』に載った作文にかい間みることができるので、なかから幾つか紹介してみたい。

尋常小学校五年 一一歳

今年、家では兄さんが四人も兵隊検査を受けた。駒沢の府立園芸学校へ通ってゐる武兄さん、去年中学校を卒業してから園で事務をやっている元雄兄さん、房州北条の中学を出た明兄さんと、それから茨城の河原子町で瓦製造をやっている熊兄さんの四人です。それで明兄さんだけは不合格となりました。あと三人の兄さんはまだわかりません。

尋常小学校六年 一二歳

秋は野にも山にも楽しみがみちて居る。うらかな日にはやまがらやほおじろが嬉しさうにさへづつて居る。大根が土を被つてズンズン大きくなつてきた。

青南小学校を卒業した松島は大正七(一九一八)年四月、青山学院中学部に進学した。この年は米騒動が起り、

シベリヤ出兵もあり、世情は騒然とした。ついでにいえば異父弟、博太郎が育成園に引き取られたのも、この年の暮れ、一月二十六日のこと。当時の青山学院は、校史によると拡張期にあたっており、生徒数や施設に大きな変化がみられた。学校組織は中学部の場合、修業年限は五年、一週間の平均授業時間は三〇時間、教員は三四名である。『青山学院九十年史』によると、「父兄は各階層にわたり、その職業もさまざまである。また生徒でキリスト教徒の家庭のものは非常に少なく、中学部、高等学部の低学年の学生のほとんどはキリスト教徒者でない<sup>(25)</sup>」。つまりミッシオン・スクールも明治期とカラーが変わり、教育の大衆化が進んでリベラル・アーツを中心とした私学中等教育機関になりつつあった。松島が四年生の大正一〇（一九二一）年には、中学部の生徒数は八〇〇名を越える大所帯となった。中学部二年の正儀が記した作文をここに紹介してみたい。世はまさに欧州大戦のまっただなか。

照り渡る光シンシン眼に痛く、真夏真午間人声もなし、強い日の光が照り渡っている、木の葉はキラキラ輝いて苦しい呼吸をしている様だ、犬が赤い舌を出して郵便箱のそばに寝てゐる。乾いた路にはカスカカにほこりがたつて誰も歩く人もない、二階からベンベンと思ひ出した様に三味線が聞こえて人も草も木もみんな眠っている。何といふ強い日の光だらう、ドイツの強い事か思ひ出される、去年の秋を思はせる恐ろしいアラシがあった、ひどい地震があった、夜空と地平線を見よ、ピカピカ青白いイナヅマが毎晩輝いてゐる。軍艦河内が沈んでしまった。之からどんな事が起るのかしら、恐ろしい事許り、僕は見たたり聞いた、世界中が大戦争の渦の中で真面目に盛って働いているのだ、我日本も油断する勿かれ、真面目なれと教へているのだ、アラシの時も、地震の時も、そして軍艦が沈んだのを聞いた時にも僕はそう思つて一生懸命に成つた、真面目でやれば何だつてでない事はない筈だ、真面目は誠実だ、皆しつかりやれ、進め、戦へ、叫べ。<sup>(26)</sup>



このように、中流家庭の子弟とともに学生生活をおくる松島は、当時の施設児童としては恵まれた環境にあった。「当時の私はテニスが好きで、時々プレーをするとともに、ギリシャ正教の信者の方が経営する修善寺の温泉旅館に秋の二泊三日、宿泊することを楽しみにしていた。たしかに貧乏苦学生ではあったが、それなりに学生生活を楽しんでいた<sup>(27)</sup>」。この間、北川もその居所を青山の本部から駒沢の分園に移している<sup>(28)</sup>。大賀潔は明治四四(一九一三)年八月、いったん長兄一郎に引き取られた後、再び上京、育成園に起居しながら松島とともに青山学院に通い、クラスも同じであった。一郎は、当時の様子を次の様に語る。

私が名古屋に参つて家庭を持ち、この末弟を引き取るまで二ヶ年ばかりの間、彼はこの育成園にご厄介になりました。それから彼が業を終えて後、小さな病院の長となつて結婚し、後医学博士の学位を得ましたが、その間二十年、常にこの北川さんをお母さんとよんでお世話になりました。それから七年後、このお母さんの亡くなるまで、前後二七年間の長い間、私共はほんとうにかわいがられました<sup>(29)</sup>。

ここで大賀一郎に触れてみよう。明治一六(一八八三)年四月に生まれ、昭和四〇(一九六五)年六月に逝くなつてゐるから、八二歳の長寿を全うしたことになる。明治三九年、岡山から上京、第一高等学校に入る。中学時代から東京独立雑誌に親しんでいた関係から、内村鑑三の聖書講義に出席、やがて「角筈二人組」の一人、高弟として世に知られるようになった。四二年、二六歳で東京帝国大学理科植物学科を卒業、引き続き大学院で研究、大正六(一九一七)年、三四歳の時、南満洲鉄道株式会社教育研究員として大連に赴任、大正一五年には奉天教育専門学校教授となつた。昭和に入ると満州事変の際、会社が軍事勢力に妥協的姿勢をとることに不満を持ち、

一五年にわたる満州生活に見切りをつけ、東京に戻った。東京女子大学講師を勤めながら戦後を迎えたが、潔はこの兄と離れ、前述した様に東京暮らしを続けた。鶴崎久雄によると「その頃は、誰も彼もがよく運動をしたものである。グラウンド一杯にはち切れそうな若い力を漲らせてゐた。だから雨の日だの、冬の雪溶けの日などの雨天体操場の混乱は一通りでない」といったキャンパス・ライフをおくり、孤児でなく、生活に窮していたわけでない潔が育成園に暮し、青山学院に通うことができたのは、北川の個人的な俠気とともに、「育成園は、単に不幸な親のない子弟をあずかるだけの所ではありません。有為にして不幸な子弟を愛育する施設<sup>31</sup>」であったこと、別の角度からみれば、ここは「苦学生の塾」でもあった。松島は「東京育成園の裏に、小さいのですが苦学生の塾みたいなものがあつたのです。そこに大賀潔と私がいた<sup>32</sup>」と語った。育成園は孤児収容施設であると同時に、有為の青年に寄宿の場を提供したわけ。園児の分園移住が完了した後も、青山の本部は後援会関係の事務や財産管理といった庶務が残り、それは松島の手任せられ、事務責任者となった。しかし、そのまま園の管理者になる意志はなく、当時の心境を綴った文章が残されている。園長職を北川の後任として引き継ぐ話であるが、昭和八（一九三三）年の文章をみると、いかにも淡々と引き受けたかのように経緯が語られる。もうひとつは、昭和五三（一九七八）年に記されたもの。前者は青年社会事業家として自立した後の文章で、後者は晩年の回想である。筆者としては本音は後者にあると見たい。

若い時大学の教授、宗教科の教授になりたい希望があつたので、直ぐには返事が出来ませんでした。で三日間考へる時間を与へてもらいました。そして、四日目の朝、私は母に答へて育成園経営を誓ひました。その時の私の考へは、組織立ったものでは

ありませんでした。しかし、どうかして事実の上に愛を活かし、人格を生かして子供の兄弟姉妹となり、生活して生きたいといふ一念でございました。これが私の社会事業にたづさはるやうになった最初であります。<sup>(33)</sup>

園の仕事を継いでくれないか、という話が出た時には突然であつたので、返事が出来なくて三日三晩も悩んだのです。それは、大学の先生になるということが私の希望だったので、大学の哲学、宗教学の先生になるという方向で進んでいた。そういう希望のもとに学校生活をしてきたものだから、それが、ある日突然に呼ばれていわれたので、結局その時点で自分の希望を捨てる訳ですね、今日のように社会福祉施設の園長さんは、身分保障があつて、ちゃんめしを食つていけるというのではなくて、自分の給料のことなんか全然考えない、子どもと一緒に、その日一日がたべられたら感謝していくというふうでしたから。<sup>(34)</sup>

結局、清水の舞台から飛び下りる気持ちで学問、教育を天職としたい夢を断念、あとは社会事業家としての自身を形成するため哲学、宗教学ではなく、経済学、社会学といった社会科学の勉強に向うべく、上級学校に進む。この時から「職業につくというより、私自身としては、神によって私に与へられた使命である、あるいは召命観」といいますか、神に任せ、人に仕えるという考え方が及ばずながら子供たちと共に、生涯をいっしょに暮らすことに決めました。人生行路を一転したのです。<sup>(35)</sup>

青山学院を卒業し、正規職員となつた松島は、明治大学専門部に進学する。選択したのは経済科で、その理由を「この仕事をやる責任が自分自身にも強く意識されてくるようになり、やはり専門の勉強をすべきではないかと考え、救護事業から社会事業への勉強をしたいと思ひました」といふ。明治大学専門部は大正一〇(一九二二)年、二部法科専門部から始まり、二年後の大正二二年、一部経済科専門部が発足した。元来、「商業学方面ヲ修得セシメ卒業後前者ハ公務又ハ法律業務ニ従事スル適材」を養成することが目的で、松島としては勤務の都合と、

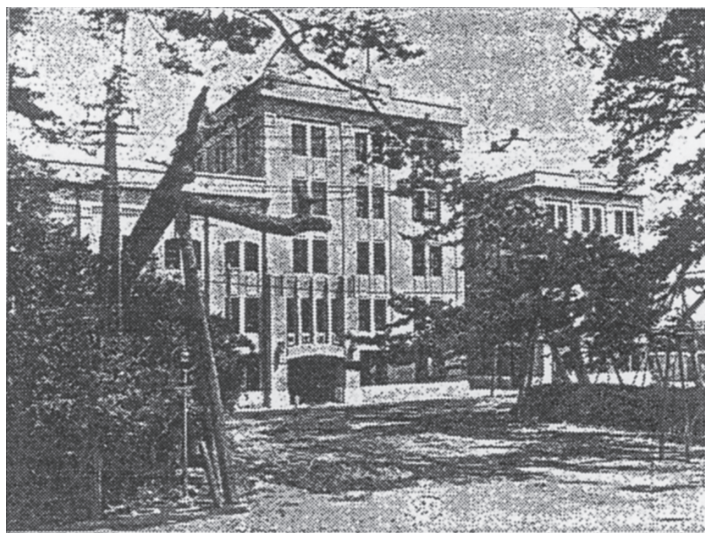
選択科目のなかに社会政策、労働問題、社会事業が含まれていることに魅力を感じた。ちなみに、正規職員となった頃の育成園は臨時救護人員一六名、現在保護人員四四名、建物による収容能力は三五名である。昼間は青山の本部で事務をとり、夜は神田の駿河台に通う彼のもとに、一三年六月六日、徴兵検査甲種合格の通知が届き、翌一四年一月、麻布の近衛歩兵第一連隊に入営、陸軍三等看護卒となった。やがて一年半の兵営生活を終え、除隊した時には衛生伍長となっていた。後に、この時受けた看護教育、訓練が施設の衛生管理に役立ち、太陽灯や酸素吸入器を取り入れる契機となった。昭和三（一九二八）年三月、二四歳で大学を卒業すると、東京育成園主事となったが、当時「男性は私一人しかおらず、今でいう指導員的な仕事をしていました。あとは全部保母でした」という。

出生から育成園に収容されるまでの幼少期は波瀾に富み、荒波にもまれて船出するような人生であった。後の回顧によれば、「私に非常に大きな疑問を残したままになっていたので。そういうことで私は宗教、哲学の道を考えるようになった」<sup>(36)</sup>。若くして人生の不条理を経験した者が、宗教や哲学に接近したケースは古来、少なくない。松島の場合も人生を選択するうえで、こうした経験が深く関わったであろうことは、十分に考えられる。育成園に収容されて三年後の満八歳で、周囲に導かれて日本ハリストス正教会の幼児洗礼を受けた。代父は大賀一郎、代母は妻のうた、洗礼名（聖名ともいう）はヤコブである。さて、青山学院時代にはひとつ、忘れられない経験がある。それはキリスト教徒として自己を確立する機縁を得たこと。具体的には、一郎を通じて内村の提唱する無教会信仰に近づいた。大賀が内村の高弟であったことは、既に述べたとおり、「大賀一郎博士を知り、同じ内村先生の高弟の浅野猶三郎という先生から聖書の講義を何年か聞いたのです。先生は人間としても、信仰

の面からもたかく尊敬できる人物で、こういう先生に私はいい出会いをした<sup>(37)</sup>。園長の北川は、生涯をハリストス正教会の熱心な信徒として過し、園内に礼拝堂を設けるなど園児の宗教教育に熱心であった。松島の無教会主義をどこまで理解し、受容したかはにわかには判じ難いが、松島は北川の生前にハリストス正教会の看板を下ろすことはしなかった。正式にプロテスタント・キリスト教に変更したのは戦後になってである。浅野については及するならば、内村が明治三三（一九〇〇）年夏に、東京角筈で開催した第一回夏季講談会の後、この時出席した有志が東京独立苦楽部を結成、翌年の第二回講演会の後、角筈聖書研究会となった。中心メンバーの一人浅野猶三郎の他には小山内薫、倉橋惣蔵、西沢勇志智、志賀直哉がいた。同じ頃、内村を主筆に月刊誌『無教会』を創刊、浅野は第一三号以後編集人となった。松島は大賀が南満洲鉄道株式会社に職を得た後、たびたび大連、奉天の彼を訪れ、幾度か往復している。このことがひとつの契機となって、戦後「満州、今の中国からの引き揚げ孤児、引き受けの時に東京育成園で引き受けた<sup>(38)</sup>」という。

大正七（一九一八）年六月二四日付官制公布によると、内務大臣の諮問機関、救済事業調査会は、社会政策、社会事業の在り方を審議した結果、新たに協議会設立の答申を行った。協議会には社会政策講習所を付設することとし、社会事業関係者もこの専門教育を受講できるようにした。講習所の設立趣意書（大正九年三月）をみると、「工場の監督及び救済事業に従事する者、工場鉱山等に在て労務者の薫陶、又は生活改善を画策する者、其他民間に於て社会事業を経営し、又は之に関する思想の宣伝に従事する者」が入学の対象となる。とりわけ「社会事業に志ある者の教養に遺憾なからん事を期す」目的を考慮し、ここに門戸を広くあけた。では、その講義内容はどうか。労使協調を図るための思想教育であるとか、労働争議から企業を防衛する管理技術であるとか、労働運





協調会館

動を牽制するための方法論を教授するとか、「企業の論理」、「労働政策の普及」をねらった教育機関かというところ、そういう方針はなかった。大正デモクラシーの世相を反映して多分に自由な、そして現場主義を重視する実際の講義を多く用意した。

官衙公共団体に在って工場の監督及び救済事業に従事する者、工場鉱山等に在て労務者の熏陶又は生活改善を画策する者、其他民間に於て社会事業を経営し、又は之に関する思想の宣伝に従事するものをして、専門の知識を備へ、特殊の素養を有せしめざるべからず。本会深く茲に鑑み、我国に於ける最新の企画として社会政策講習会を設立し、以て社会事業に志ある者の教養に遺憾なからん事を期す。<sup>39</sup>

大正一〇（一九二一）年の講義科目を例に、「正科」のうちから社会事業に関連するものを取りだすと、「社会事業大意」、「救貧及防貧」、「教化事業」、「児童保護」、「失業問題」、科外講義としては「社会事業家に就て」、「最近社会事業の趨勢」があり、ここに施設見学を含めた。

見学先としては東京鉄道病院、横浜社会館、横浜公衆浴場、日暮里小住宅、府立公営質屋、桜楓会託児所、東京市中央職業紹介所、東京市立車坂簡易食堂が含まれている。当然、関連業界の関心呼び、各地の官公署、工場、鉾山、社会諸施設の「それぞれ枢要の地位を占める」者が受講した。教育設備も大正一二年三月二四日、協同会館の新設にともない、校舎をここに移し、名称も社会政策学院と改めた。所在地は芝区芝公園第二四号地で、芝増上寺の門前にあつた。松島が入学したのは昭和三（一九二八）年四月、育成園主事となつてまもなくの頃。回想によれば「学生の大部分は工場や会社から派遣された者であつたが、ここで矢吹慶輝先生に出会つた」ことが思い出される。大正一二（一九二三）年の社会事業関係講師陣は、「社会事業大意」の田子一民、「救貧及防貧」の生江孝之、「児童保護」の小沢一で、元もと松島を同学院に結びつけたのは生江で、「私自身の直接の先生は生江孝之先生なのです。一つには青山学院の先生をしていたこともあります……その時は日本女子大の先生で清貧な生活で、人間的に優れた先生でした」と語り、同学院では経年的に教え、松島は学歴が考慮されて特別研究科に入り、二年コースの特別研究生となつた。つまり、「特別に志願しまして、事情を申し上げまして特別研究科として二年だけ入れていただくことに成功いたしました」。そして、この「研究科在学二年は大いなる勉学になつた」と語るように、熱心に学んだ。社会情勢の分析や労働問題、社会事業の専門知識を教授し、思想的にはリベラリズムを雰囲気として伝えた。昭和一〇（一九三五）年の調査によると、修了した二、五四七名を職業別に分類した場合、社会事業団体に勤務する者は四八名で、講義内容の点において社会事業に力を入れた割には、斯界の受講生は少なかつた。講義のレベルについては当時、帝大生の吉野俊彦が次の様に語っている。

内務省の外郭団体「協調会」の運営する「社会政策学院」（院長、塩沢昌貞博士）の第三八期学生となり、通学した。院生は官公庁からの学生計八六名で、講義は日曜、祭日を除く毎日、午後六時から九時まで行なわれた。テーマは労務の対立、労働立法、労働管理、失業問題、社会政策と財政、海外と国内の社会運動等々で、大学の教室では到底聴き得ない現実の諸問題にはじめて目を開かれる思いがした。

大正一二（一九二三）年九月一日、突如南関東一帯を地震が襲った。関東大震災である。この時東京育成園はどの様な状況下にあつたか。北川はこの時の体験を、後に雑誌インタビューで語っているので、まずその話を聞いてみたい。幸いなことに建て物は焼けず、また倒壊もせず無事であつた。さらに職員、園児をはじめ、関係者のほとんどは無事で、たいした怪我もなく済んだ。卒園生で罹災、育成園を頼つてきた者についても、積極的に収容、保護した。

記者 大變なことになつたものですか。

北川 私は、どうしても神の罰といふ感じがして仕方ありません。

記者 一般に、もうそろそろよみが戻つて来たのではないでせうか。

北川 そうです、そうです。この間こんなことがありましたのですよ、ある罹災の方ですが、私の處へ着物を仕立てて貰へないだらうかと言つて來られた方がありましたから早速お引受けして置きました。私の考えでは木綿物がよくつて秩父位のところだらうと思つて居たのです。ところがどうでせう。あとで持つて來たのを見ると上等のものなのでせう。それから、急に忙がしくなつたからと言つて断つてやりました、全く困つたものです。

記者 アノ時はどちらにいらつしやいました。

北川 色々用事がありまして青山の方へ行つて居りました。

記者 随分びつくりなすつたでせう。

北川 丁度青山のうちで、近所へうどんなやを出さしてゐる子供と話してゐました。ソノ時來たのです。それからころがるやうに

戸外へ飛出しました。それからそのうどんやをやつてゐる子供を歸しましたが、前の家（陸軍中佐へ貸してある）があまり静かなもんですから聲をかけますと小兒を風呂の中へ入れて居ると言うのでせう、なるほどいい思ひ付きだと思ひました、それから間もなく前の家の方々も出て来ましたが、とても怖くてうちへは這入れませんでした。今度は駒澤の方が心配になって来たので、安否を聞きに子供を自轉車でやりましたが、ソノ子供は「お母さんのことが心配で行かれない」といつて三度歸つて来ました。大丈夫だからと言つてやりましたが、それと行違へに私を心配してむかうからやつて来まして駒澤の方もみんな無事だといふことが判明りました。

記者 御損害はありませんか。

北川 お蔭さまで大したことはありませんが、それでも随分壊はれて居ました。

記者 どなたもお怪我はありませんか。

北川 ありがたう御座います。幸いみんな無事でした。奉公にやつてある子供が十人もありますが、一人も怪我はありません。それに嫁にやつたのや、こんどカルカッタへ總主任として轉任することになった横濱の郵船に居る三男なんかも、焼け出されましたが、みんな無事で助かりました。

記者 避難者は来ませんでしたか。

北川 二晩ばかり、大勢の避難者と一緒に本院の庭で野宿しました。小兒達には長椅子を持ち出して、二つ宛立ててそれへ蒲團を敷いて小兒を寝かし、ソノ上へ蚊帳をかけてやりましたが、輕便で大へんいいベットが出来上りました。

記者 現在の收容者は。

北川 三家族ありますが、これはみんな嫁にやつた先の家族です。京橋の方から十人に深川の家が五人、本郷の方から二人都合一七人来て居ます。京橋の方は西洋家具屋ですが、あれからも五百圓ばかり仕事をしたと言つて居ます。これなどは焼け太りになるかも知れません。

記者 震災後の御活動は。

北川 今はなにもやつて居ません。時代は違ひますけれども私も納豆賣迄してこれだけにしたのですから、やつてやれないことはないと思つて居ますけれど、先達、鶴岡に居る醫學博士になった和合といふ子供が（明治二九年五月五日のつなみの際に

不思議にも一家十数人の内たった一人助かった、その人（が来てくれて、『二十年前のおっ母さんぢやない、あなたがちつとして居てもみなさんがやってくれる、それでも時期が来れば、あなたでなくてはならない仕事が出来てくる』といふのです。こんな譯で、今はなにもやっっては居ませんが、それでも三、四十人位收容れる心仕度はして居ます。それで今勢出して着物を拵らへて居ます。私の處へ来るのはまあ本年の末か、來年の正月頃だらうと思つて居ます。今の内は誰れでもやりますが、あきが来るだらうと思ひます。長く持續してやってくれば尚ほ結構でございますけれど、それがどう行くものかと考へて居ます。

記者 さぞお楽しみで御座いませう。

北川 中々らかなものでは御座いませぬ、男の子はよござんすけれど、女の子には中々骨がをれます。<sup>(4)</sup>

その他、貧困者で行き場がなく、困つていた人びとも適宜收容、保護した。エピソードを紹介してみる。近隣の陸軍兵舎から三〇〇ベッドを提供してもらい、それに仮設テントを作つて臨時救護所とした。次に、罹災孤児を対象に第五回臨時預児部を開設した。こうした活動に対して、後日政府は斎藤實首相名で感謝状、銅盾を贈つた。もうひとつは、どちらかといえば些細な話だが、政治家福田赳夫が洪沢多歌子の主催するチャリティ・ショーに出席した際、松島に語つて曰く、「ぼくは君のところをよく知つているんだよ、大正一二年、東大野球部のキャプテンをやつていたとき、宿舍が地震で焼失したんだ、そこで育成園の座敷二間を貸してもらつて、一〇日間ぐらい泊まつたんだよ」。



註

(1) 「私が社会事業にたづさはつてこの方、三十幾年間のことを顧みまして、最も感激を受けてゐますことは皇室と社会事業との距離が狭められ、近づけられたということがあります」。北川波津「思出」、『社会事業』、第一〇卷九号、大正一五年一二月、七八頁。

- (2) 『東京孤児院月報』、第一号、明治三四年二月一〇日、一頁。
- (3) 『東京孤児院月報』、第八号、明治三三年一月一〇日、一頁。
- (4) 『東京孤児院月報』、第二五、二六号を参照。
- (5) 『東京育成園』、東京育成園、明治四〇年二月、七四頁。
- (6) 前掲書、一〇五頁。
- (7) 同書、一〇三頁。
- (8) 『慈善』、第一編一号、明治四二年七月、一〇三頁。
- (9) 『東京育成園月報』、第九卷三号、明治四一年三月、三頁。
- (10) 大賀二郎「ハスと共に六十年」、日本図書センター、一九九九年、一五二頁。
- (11) 『東京孤児院月報』、第五号、明治三三年八月一〇日、二頁。同第七号、明治三三年一〇月一〇日、三頁。
- (12) 吉田久一、一番ヶ瀬康子編『昭和社會事業史への証言』、ドメス出版、一九八二年九月、一一頁。
- (13) 吉田久一、一番ヶ瀬康子編、前掲書、一二頁。
- (14) 同書、一二〜一三頁。
- (15) 『東京育成園月報』、第一〇卷五号、明治四二年五月、一頁。
- (16) 立花雄一『評伝横山源之助』、創樹社、一九七九年四月、二五三頁。
- (17) 『東京育成園月報』、第一〇卷一号、明治四二年一月、五頁。
- (18) 『月刊福祉』、一九九四年一月号、八五頁。

回想の松島正儀（一）

- (19) 前掲書、八七頁。
- (20) 立花雄一、前掲書、二〇頁。
- (21) 黒田源太郎『炉辺夜話』、非売品、昭和八年一〇月、四四頁。異兄妹、梢は昭和三八年一月二日、五五歳で逝くなった。
- (22) 『東京育成園月報』、大正八年一月、三頁。
- (23) 『東京育成園月報』、大正四年七月、五頁。
- (24) 『東京育成園月報』、大正五年一二月、三頁。
- (25) 『青山学院九十年史』、青山学院、昭和四〇年九月、四〇五頁。
- (26) 『東京育成園月報』、大正七年七月、三頁。
- (27) 日本基督教社会福祉学会編『キリスト教社会福祉の証言』、日本基督教社会福祉学会、一九九二年三月、八一頁。
- (28) 『東京育成園月報』、第二一九号、大正一〇年七月、一頁。
- (29) 大賀一郎、前掲書、一五一頁。
- (30) 『青山学院五十年史』、青山学院、昭和七年一月、二二八頁。
- (31) 大賀一郎、前掲書、一五七頁。
- (32) 吉田久一、一番ヶ瀬康子編、前掲書、一六頁。
- (33) 『社会福祉』、第一七卷一〇号、昭和八年一〇月、一一三〜一二四頁。
- (34) 『児童養護』、第九二号、昭和五三年九月、三七頁。
- (35) 松島正儀『社会福祉とわが人生』、『一九八二年心配事相談事業年報』、全国社会福祉協議会、昭和五八年三月、四八頁。
- (36) 吉田久一、一番ヶ瀬康子編、前掲書、一五頁。
- (37) 松島正儀『子どもたちと共に半世紀』、『児童養護』、第九二号、昭和五三年九月、三七頁。
- (38) 松島正儀『日本の児童福祉と私』、『ソーシャルワーカー』、創刊号、一九八九年一月、七三頁。
- (39) 『財団法人 協調会史』、偕和会、昭和四〇年五月、二八頁。
- (40) 「この先生の影響が私には大部ありますね」、『児童養護』、第九二号、昭和五三年九月、三七頁。

- (41) 松島正儀 「子どもたちと共に半世紀」、『児童養護』、第九二号、昭和五三年九月、三七頁。
- (42) 松島正儀 「日本の児童福祉と私」、『ソーシャルワーカー』、創刊号、一九八九年十一月、七〇頁。
- (43) 『月刊福祉』、第六一卷四号、昭和五三年四月、七二頁。
- (44) 『社会事業』、第七卷六号、大正一三年二月、三三〜三五頁。

(続)